
ラスト・キス

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスト・キス

【Nコード】

N7459Q

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第8弾。大学時代の同窓会に招待された新田と芝井。しかしそこで殺人事件が発生。犯人は誰なのか？絡まった糸を論理的に解いていく本格ミステリ。

プロローグ

「久しぶりだな、お前の車に乗って遠出するのは」

エアコンの温風で車内が暑くなってきたので少し窓を開け風を感じながら芝井に話しかける。「そうだな」とつれない返事もいつも通り。今日は大学時代の同窓会、というほどでもないがゼミで同じクラスだった人達の集まりの日。2ヶ月前に招待状を受け取っていて嫌がる芝井——俺と芝井は同じゼミの生徒だった——を無理やり引き連れて小旅行中というわけだ。8人の小クラスで全員参加する予定なので芝井を連れて来るようにと幹事である宇野健太に念を押されていた。

「へえ、お前柄にも無くこういう音楽聴いてんだな」

流行っているというわけでは無いが時々ドラマや映画のタイアップにと活躍しているロックグループの新アルバムだ。

「俺だって良い歌は進んで聴くよ。曲というより歌詞が興味深い」

助手席のドアポケットに入っていた歌詞カードを取り出してパラパラと捲る。『フォレストスター』という曲名に目を留めた。

『生きる』と死ぬは紙一重　だからその日を生きるんだ
助走もつけずに走り出す　突き抜ける悲しみの世界』

口に出して読んでいると芝井が口を挟んできた。

「意味わかるか？」

「そりゃ日本語なんだから判るに決まってるだろ」

口を尖らせて反論する。

「作詞者が本当に伝えたいことだよ。この作詞者は知識が深いぞ」

「伝えたいこと？」

首を傾げた。暗号のようなものが潜んでいるとも言いたいのだろうか？

「『生きる』と死ぬは紙一重 だからその日を生きるんだ』というのは西洋思想の言葉『メメント・モリ』と『カルペ・ディエム』を表しているんだと思う」

「メメント なんだった？」

急に呪文のような言葉を発せられても訳がわからない。

「メメント・モリだよ。訳すと『自分が死ぬということを忘れるな』という意味だ。巷に溢れている歌なんかは生を前提にしているのがほとんどだろ？夢とか愛とか言ってるや良いみたいな。けれどこの作詞者は死を前提にして考えているんだ。そこでカルペ・ディエム、訳すと『その日を摘め』さらに意識すると『今この瞬間を楽しむんだ』という言葉が出てくる。人は必ず死ぬのもだからその日を楽しむことが生きることだと言いたいんじゃないか。そして『助走をつけず 悲しみの世界へ』というのは悲しみや苦しみはこちらが助走をつける間も無くやってくるがそれらを乗り越える勇気や努力が必要だと言いたいんだろう。つまり生きるというのはただ単に安樂的な愉悅を求めるのではなく、不安や不満その他悲觀的な状況をも含めて楽しみに変えていくように勇気や自信を持っていかなくてはいけない、ということ伝えたいんじゃないか。それともうひとつは現代社会に対するアンチテーゼという意味も含まれているんだろう。」

「そこまで深読みするか、と感心しながらも呆れていたが疑問も残る。」

「それが本当に伝えたいことならもっとストレートに言ってもいいんじゃないか？」

と言うと芝井は微笑した。

「それがアンチテーゼなんだよ。この作詞者は現代人が文章や言葉、氾濫している情報を安直且つ短絡的に妄信してしまう現状に落胆しているんだ。これぐらいの事は読み取って欲しい、と考えて敢えてオブラートに包んでいるのさ。まあメロディやメディアの商魂が勝ってしまう現代ではそれも虚しい抵抗のように思えるが、そういう

反骨心というかマイノリティの精神に共感してしまうんだ」

あんな短い歌詞にそんな深い意味が込められているのだろうか？
しかし芝井の頭を介せばそのようになるのだろうし、本当に作詞者の心中を読み取っているんだと思う。『死から考え始める』か、
現在を生きている者にしてみれば盲点なのかもしれない。しかしあまりにも深く、重い題材。職業柄いろんな種の犯罪者はもちろん被害者、関係者の人間模様を見てきたが『答え』を持って生きていた人がいただろうか？そして自分は。

「おいおい、お前こそ柄にも無く物想いに耽っているじゃないか。
お前はいつもトンチンカンな発想を思いつきでしゃべって俺を苦笑させる役割だろ？」

芝井が皮肉な笑みを浮かべて俺の思考回路を止めにかかった。
「誰がトンチンカンだ。少しはワトソンの役割も果たしてるだろうが」

「なるほど。じゃあ刑事なのにワトソンっていうのは認めるわけだな？」

「ぐぐ」

唇を噛んで悔しがる。しかし芝井の顔を見ると屈託のない笑顔を
見せていた。それに釣られて俺も自然と笑みがこぼれる。そうだ、
いつもそうやって笑わせて手を差し伸べてくれるんだよ、お前は。
「それにしても何でそんな辺鄙な場所で集まらなけりゃいけないんだ？」

右折待ちで対向車を気にしながら芝井が話しかけてくる。

「ああ、それはそこに凡の親父が所有している別荘があるだろ。学生時代は何かっていうとそこに集まってたからな。あれ、お前行ったこと無かったっけ？」

「ない」

凡、こと佐藤次郎——名前が平凡すぎるところに由来——の父親が中堅会社の役員をしていたころに購入した物件で20畳ほどの広さのログハウス風の建物で自然豊かな避暑地に立地している。夏休

みはもちろん学園祭やゼミのプレゼンの打ち上げ等で頻繁に利用させてもらっていたのだが、もともと人付き合いの苦手な芝井が参加することは少なかった。そうか、来たことなかったか。

「で、ここはどっちに行けばいいんだ？」

入り組んだ道に入ったところで芝井がナビゲートを要求してきた。たまにはワトソンも活躍しないとな、と意気込んで話そうかと思つた瞬間、

「と先天的な方向音痴のお前に聞いても仕方ないか。」

芝井は独り言のように呟いて脇道に車を寄せ、パラパラと地図を捲る。フツツと自嘲的な笑みがこぼれた。そういえば学生の時も自分が運転してここまで来たことは無かったので芝井の言うとおりナビゲートを頼まれても案内のしようが無かった。俺は何を意気込んでいたのだろうか？という意味を含んだ前述の自嘲的な笑み、洋々と現れた俺の心の中のワトソンは全く見せ場の無いまますすこと肩をすばめてフェイドアウトしていくのだった。

「よし、着いたぞ」

地図をパタンと閉じた芝井の声にハツとして顔を上げると、まさに学生時代に時計の針を戻したのかと錯覚してしまうほど変わらぬ風景。

車を降り深く深呼吸する。目を瞑ると色々な記憶が甦ってくる。

あの頃に戻りたい、とは思わない。過ぎ去った日々は取り戻すことが出来ないのだから。『今を楽しむ』、これに尽きる。苦しんで悲しんで悩んで 楽しむのだ。目を開けて空を見る、雲の形が綿菓子のように見えて少し笑えた。

腕時計を確認すると予定より若干早い到着。だが車を停車した場所に別の車が何台か停まっていたのもう誰かは来ているのだろう。十数年ぶりの再会、みんなは変わっているのだろうか？期待と不安を胸に抱きつつ呼び鈴に手を伸ばした。

再会

呼び鈴を押して間もなくドタドタと人が駆け寄って来る音がした後勢いよくドアが開いた。

「おおー、新田久しぶりやな。ちよつと痩せたんちゃうか？入れよ。それに芝井も。もうみんな集まってるんや」

幹事役の宇野健太が野太い声の関西弁で出迎えてくれた後振り返り、中の同級生たちにこれまた大きな声で俺達の到着を告げた。散り散りに寛いでいた男性陣は皆一様に顔を向け「よお」等と声を掛ける者もいれば手を上げて応える者もいる。女性たちは奥のオープンキッチンで食事の準備をしているのか背中がせかせかと動いているのが見えた。皆かなり早く到着していたみたいで、各々の近況報告は済ませて一段落という雰囲気の流れている。キヨロキヨロと周りを見渡して二人分スペースが空いているソファアを見つつけ芝井と共に腰掛ける。家具のレイアウトは若干変わっているみたいだな、まあ別にいいけど。

「久しぶりだな」

芝井と逆隣りに座っていた男が声を掛けてくる。すでにアルコールが入っているみたいで薄ら笑いを浮かべているが目はだらしく垂れ下がっている。三木康則、学生時「遊び」程度に出席していた彼の雰囲気は10年経っても変わらない。ジーンズにセーターの組み合わせも暗い色で統一された色調も大学時代を彷彿とさせる姿だ。「久しぶりだな、三木。変わらない姿で安心したよ。」

「外見はそれほど変わってないかもな。けどこの世代の話題といたら結婚や昇進の話ばかりでウンザリするよ。こちとら未だに独身で無職だから話についていけない」

自嘲気味に笑い、缶ビールを手取る。三木は長身痩躯で決して顔も悪くない。本人がその気になれば結婚も仕事も手に入れることが出来るだろうがその目からはやる気が全く感じられない。それが

印象面でマイナスイメージを与えているのかもしれない。

「新田、お前警察官なんやってな？」

横槍を入れてきたのは宇野健太。宇野と今キッチンで準備している乾真佐子は共にスポーツ推薦で関西圏から入学してきた学生だ。因みに宇野は野球で乾は テニスだったかな。ゼミは必須科目であるため一緒に学業にも励んでいたという経緯。

「まあ一応な。平の刑事でコキ使われているよ」

「何かおもしろい事件の話無いんか？直に犯人捕まえたとかガサ入れ行つたとか」

ああ、こんなガサツな奴だったなあ、と思いつつ先ほどの発言に不愉快な気分になる。『面白い事件』なんて有るわけが無い。どんな事件も被害者はもちろん傷つく関係者が存在する、精神的にも肉体的にも。あれだけ純粹だった子供の心に憎しみが宿り、あれだけ明るかった娘は闇に染まり、あれだけ誠実だった青年が墮落していく。そんな光景を何度目にしてきたことか。そして塞ぎ込みそうになる自分の心をどれだけ虚しく鼓舞してきたことか。後にも先にも現場の実情を味わうことはないであろうこの男に言っても仕方ないことだが、この種の無神経な発言には失望を禁じ得ない。悪い奴ではないのは判っているが。

「無いよ、俺はヒラだからそんな重要な事件に関わってはいない」
はぐらかすように小声で言う。自然と目を伏せがちになってしま
うのは悲しい事件を思い出してしまったからなのだろう。

「そうか、まあ俺達の税金分は働かなあかんで」

ガッハツハ、と笑いながらキッチンの方へ歩き出した。ふう、と
何故だかため息が漏れる。

「そういえば凡はどこにいるんだ？」

無言でビールをあおっている三木に再び話しかける。

「裏のゴミ出し場に行ってるんだろ。ほら何時だったかここで遊んでた時酔っ払って花瓶割ったりカーテン汚したりしたことがあった
だろ。俺たちが帰った後こっぴどく怒られたらしいぜ。それから

ここを利用したときは利用する前と同じ状態で帰らないと今後一切の使用は認めないと書面で提出させられたんだと、役員の親父らしいだろ？まあそんなこともあってゴミもちゃんと持って帰らなければいけないそうだ。試しに床にゴミを落としてみるよ、凡が見つけたら血相変えて飛んでくるから」

クツク、と気味の悪い声を出して答えた。こういう話し方も女性にとってはマイナスポイントだな、と勝手ながら思ってしまう。三木の言っていたことは正しかったらしく、裏戸の方からブルブルと身を震わせながら凡の姿が見えた。挨拶ぐらいはしないとな、芝井の肩を叩いて彼の意を確認するとスツと立ち上がったので二人で凡のいるキツチンの方へ向かった。ついでに女性陣にも一通り面通ししておくか。

「ああー！新田君だ。久しぶりだね、元気？」

いきなり耳が痛くなるほど高音で迎えてくれたのは大久保希望のぞみ、騒がしいのは相変わらずなんだな。

「そうそう、この前凡ちゃんと飴作りを体験させてくれる所に行つて飴作つたの。ほら食べてみて」

こちらの返事を待つことも無くポケットから二つ飴を取り出して俺の目の前に差し出してくる。別に断る理由も無いので大久保の掌から一つを摘み、セロファン包装を解いて口の中に放り込む。大久保はもちろん、他の女性達までも俺の顔を見ているのが気になるが。

「うん、甘くて美味しいな」

実際砂糖のような味しかしなかったが不味くはない。

「その飴の中にさらに美味しいエキ스가入ってるんだ。カリツと噛んでみ？」

言われるがままにガリツと飴を噛み砕いてみると、

「辛い！！何だ辛いぞ、これ！み、水、水をくれ！」

しゃがれた声で叫び流し台へ駆け出した。女性陣の大きな笑い声がするがそんなことは構ってられない。水をたらふく飲んだ後大久

保を睨んだ。大久保はそんなことは意に介さず俺が握っていた飴の包装を取り上げた。

「赤い線が入ってるから唐辛子味だね、これ。ナイスリアクション、新田君」

半笑いで親指を立て反応を称える。そういえばコイツはこういうイタズラっぽいことが大好きな奴だった、と後になつて素直に応じたことを悔やむ。

「赤い線が唐辛子味なら、その茶色い線は何味なんだ？」

口を濯ぎながら尋ねる。

「茶色はねえ、納豆味だったかな？食べたいの？」

「食べないよ！」

大声で拒否すると再び女性達が大笑いした。

「災難やったねえ、けど私も同じようにやられてるから」

ポンポンと肩を叩いてきた女性は、乾真佐子だった。スラッときつい手足は学生時代と同じ。スポーツ好きなこともあって体形維持には余念がないようだ。

「乾は何味を食べさせられたんだ？」

「私は緑線の野菜味、苦くて不味かったあ」

その時を思い出したのか顔を歪ませる。それでも俺の唐辛子よりは随分マシなような気がするが。

「新田君は学生時代も真面目だったからこういうイタズラの的だったもんね」

いつの間にか乾の隣りにいたのは岸田久美。こちらは以前と比べてぽっちゃりしている。そういえば仕事で行けなかったけど何年か前に結婚式の招待状が来ていたつけ、幸せ太りか。

「岸田は結婚したんだな、悪かったな結婚式行けなくて」

「刑事は忙しいっていうから仕方ないよ。それにもうすでに一人だしね」

と言って舌を出して笑った。一人、ということはもう離婚したのか！最近の若者の考えはよくわからないな、といっても同じ年だ

が。

「ほら久美、早く準備しないと料理食べられないよ」

後ろから大久保の声がした。全くさつきは俺をダシに遊んでたくせに。自分のペースに持っていくのが上手いんだから。岸田も「はい」と返事して準備しだったので再びキッチンが慌ただしくなる。

そういえば凡はどこだろう。当初の目的を果たせずしてキッチンを出たが、窓の外を眺めている凡の姿がすぐに確認できたのでそこらに向かう。

「久しぶりだな、凡。元気だったか？」

凡こと佐藤次郎はゆっくりとこちらに顔を向ける。ブランド物らしいスーツに腕時計。親父と同じ会社に入社したらしいが未だ業績は良いようだ。

「新田か。刑事なんだってな、お前。融通の利かないお前らしい就職先だな」

再び視線を外に移して薄っすら笑みを浮かべた。以前はもっと明るい奴だったんだが、虫の居所がわるいのか久しぶりに皆に会って戸惑っているのか表情が硬い雰囲気を受けた。

「お前は親父の会社に入って将来の役員候補か、っていうかもうなってるんじゃないだろうな？」

昔のようにふざけた感じで笑いながら背中を叩く。しかし反応は薄い。

「いずれそうなるかもしれない。が、俺は敷かれたレールに乗っかっていただけさ、実力で手にした物なんて一つもない」

今度は寂しそうに笑う。硬い表情の意味が少しだけ判ったような気がした。

次の言葉が見つからないまま二人並んで空を見ていた。いつの間にか青空は消え鉛色の雲が全体を覆っていた。

「お待たせー、料理が完成しましたー」

大久保がおどけた声で机に料理を置く。続いて乾と岸田も大久保

の後を追うように次々と皿やコップを並べる。全て並べ終えた女性三人もソファに座った。パーティの始まりを急かすような沈黙が続いた後、凡が皆の方へ顔を向け大きく息を吸った。

パーティー1

ゴホン、と咳払いをしてから凡が話し出す。

「えー、今日は十数年ぶりの再会という事でゼミのメンバー全員が揃ったことを嬉しく思う。大いに楽しんでくれ、乾杯！」

「乾杯！！」

凡がグラスを上げて音頭を取ると皆それに倣ってグラスを持ち上げる。その後めいめいが食事を取ったり談笑したりで先ほどまで静かだった室内は話し声と笑い声で一気に活気付いた。俺も何か食べようか、と紙皿片手に料理を見渡し逡巡していたら目の前に手が伸びてきたので一歩後退した。

「悪い悪い、そのチキンが欲しかったんや」

宇野がから揚げを豪快に自分の皿に盛っていた。久しぶりに会ったんだから近況でも確認しておくか。

「宇野、お前は何してるんだ？」

「何って、何や？」

「仕事だよ、どこかに勤めているんだろ？」

「俺は電子部品会社の一流営業マンや。あ、お前、今『嘘ちやうか』って顔したやろ？一流ってところはちやうかもしれんけど辣腕の営業マンってというのはホンマやで、売上も社内でトップクラスなんやから」

こいつに売り込みまれたら、つつぱりとがぶり寄りであつという間に土俵の外に放り出されてしまうな、と彼の得意先担当者の困った顔を想像して笑ってしまう。

「へえ、それは景氣の良い話だな。凡と同じでエリートコースか」
知人が出世しようとしていることに素直に喜びを表したが、宇野は先ほどの豪快な感じではなく俺の耳元に低い声で話す。

「あくまで噂レベルの話やけど、凡とこは厳しいらしいで。今日アイツと話したか？なんか暗い感じやったやろ。確かに元々そんなは

じけるタイプやなかったけど、それでも学生の時と全然ちゃうやろ。今も見てみ、難しそうな顔して一人で酒飲んどる。ありや相当会社ヤバインちゃうか？」

こそつと指差した方を見ると、確かに凡が一人でビールを飲んでる。何か近寄り難い雰囲気さえ感じるが、あつ大久保が寄って行つたぞ。一言二言話して立ち去って行く、お互い笑いながら話していたが別れた後の表情が対照的で凡の表情は硬いまだつた。

気付くと宇野は俺の隣りではなく、遠くのソファでチキンを頬張っていた、隣りに座っている乾と何か話しながら。同郷同土気が合うのだろう。俺も適当に何か摘んで席に着こう、と本当に適当に周りにある食料を1、2個ずつ皿に乗せた。一人でウーロン茶を飲んでいる芝井が目に入つたので、その隣に腰掛ける。

「さつきキッチンに行つたときは知らぬ間にいなくなつてたな」

「凡には挨拶したよ。キッチンに行くまでもなく凡がキッチンから出てくるのが見えたし、お前の所に大久保が寄っていくのが見えたから回避しなければいけなかつたし」

そついや芝井は女性が苦手なんだつた。正確に言うとかヤツキヤツと騒がしい大久保のような女性が。学生時分も乾と岸田とは会話する姿を見かけたことはあるが、大久保とは授業以外で話し合っている姿を見たことが無い。芝井も社会に出て多少なりとも免疫はできているのだろうが極力関わりたくないということか。それにしても『回避しなければいけない』なんて大袈裟な、身に危険が迫つて来ているわけじゃあるまいし。

「凡の様子はどうだつた？」

「ほとんど会話してないから詳しいことは判らないが、あんな抑揚の無い奴だつたつて。素っ気無いというか生返事ぐらいしか返つてこなかつたからな」

やはり俺と同じ印象か、一体どうしたのだろう？

「ちよつとみんなの近況を聞いてくる。もしかしたら凡の事も聞けるかもしれないし。お前も来るか？」

芝井は無言で手をプラプラと左右に振った。いつてらっしやい、ということなので一人で行こう。

近況は多人数でも構わないが、凡の事については単独で話を聞く方が好ましい。他の人を気にして当人の真意を聞きそびれてしまう可能性があるからな。どこからいこうか、あつ、今キツチンに岸田が入ったな。彼女から攻めてみるか。

「空の皿を片付けるなんて、さすが結婚経験者だけあつて面倒見が良いな」

成り行き上後ろから急に声を掛けたからか、ビクツとした後顔をこちらに向けた。

「新田君かあ。もう、おどかさないでよ」

胸に手を当てて息を整えている。そこまでおどかしたつもりはなはいんだけどな。

「あれっ、お前コーヒー飲めたっけ？」

傍にあつたインスタントコーヒー粉とカップを目にして疑問を口にする。

「あ、ああ、これ。これは食後みんなに飲んでもらおうと今から準備しようと思っただけ」

何を慌てているんだか。まあいい、本題に移ろう。

「岸田は卒業後何してたんだ？」

「何って、普通にOLして会社の同僚と結婚したただだよ。まあ1年で離婚しちゃったけど」

「今は仕事はしてるのか？」

「うん、今はバイトだけだね。何、警察署で雇ってくれるの？」

体形は変わったけど笑顔は懐かしいあの当時の面影を残していたので少し安堵してしまう。変わらないことが良いことだって多分にあるのだ。

「試験に受かってから来てくれ。みんなとは卒業以来なのか？」

「うっん、真佐子とはよくちよく会ってるよ。希望とは、久しぶりかな。後は凡ちゃんにも宇野君も何年か前に会ってるよ。どう

してそんなこと聞くの？」

怪訝そうに俺の顔を覗き込む、立て続けに質問しすぎたか。

「別に他意は無いよ、近況を知っておきたくてね。岸田と違って俺はみんなと十数年ぶりなわけだし」

俺の言い訳に納得したのか「ふうん」と頷き、「何か食べてくるね」と言い残しキッチンを出て行った。キッチン台を見ると出しっ放しのインスタントコーヒー粉の瓶と中途半端にコーヒーカップが並べられている。何だ、コーヒーの準備をしに来たんじゃなかったのか？

ここにも仕方無いのでキッチンを出て次のターゲットを探していたら、三木が相変わらず一人で飲んでいるが目に入ったのでそちらへ向かう。

「そんなハイペースで飲み続けて大丈夫か？相当好きなんだな、ビールが」

三木の隣りに座る。逆隣りには芝井がいて再び元いた席に戻ってきた感じになり、こんなことなら最初に三木から聞けば良かった、と少し後悔した。

「好きじゃないけど嫌なこと忘れることが出来るからな」

グビツと缶を傾けた後酒臭い息を勢い良く吐き出した。

「お前も以前は働いていたんだろ？」

「ああIT関係のベンチャー企業にな。けど2年ほどで倒産、それからは底辺の生活さ」

「俺とは本当に久しぶりだけどみんなとは卒業後会ってたりしたのか？」

「いいや、さっぱりだ。俺と芝井は浮いた存在だったから誘われなかったんじゃないかな」

芝井も同類に扱われるとは隣りで黙々と食事している芝井もはた迷惑なことだろう、と苦笑した。

「けど、みんなの事は誰よりも知ってると思うぜ。例えば芝井は探偵をしていて時々小学生の姪が訪ねて来て暇な時間を過ごしている。

「お前もたまに出入りしてるみたいだな」

不気味な笑みを浮かべてビールをあおる。おいおい、こいつ何かヤバイことしてるんじゃないだろうな？頼むから知人の手首に手錠を嵌めるようなことさせないでくれよ。

「なるほど、俺に関しては正解だ。確かに知恵を拝借しに出入りさせてもらっている。そういえば大学時代も何か一つの対象について黙々と打ち込むのが好きだったな、お前は。」

「たいして授業にも出てなかった俺のことを少しは判ってるみたいだな、さすが刑事、といったところか」

おだてられても嬉しくは無いがアルコールが入って開放的になっているのかもしれない。情報を仕入れるにはもってこいの相手だ。

「俺たちのことは措いという、例えば、岸田は最近どうしているのかな？」

「何だお前、岸田に興味あるのか？」

別の意味で勘繰られてしまった。まあ適当に流しておこう。

「いやいや、さっき岸田と話したんだけど聞きそびれちゃってさ、もう一回聞きに行くのも変な気がして。お前が知ってるんなら教えてくれよ」

拝むように手を合わせて頼むと「仕方ねえな」とまんざらでもない顔で頬を緩ませた。

「岸田は卒業後、凡と頻繁に会ってた。付き合ってたんだな。けれど何年かで破局しすぐ後に会社同僚と結婚。そしてこれまたすぐに離婚して今は弁当屋のバイトで生計を立てている、ってとこじゃないか」

基本的にさっき岸田に聞いた話と相違は無い、三木の持っている情報に偽りは無さそうだな。それにしても凡と岸田が付き合ってたとは新情報だ。

「凡と岸田が付き合ってたなんて知らなかったな。あいつら学生時代そんな仲良かったっけ？」

「さあ、お前が知らなかったただけなんじゃないか？けれど今凡は大

久保と付き合っている。そしてここからが面白いんだが、岸田と別れた時期と大久保と会い始めた時期が上手い具合にリンクするんだ。三者の間で一悶着あったのは容易に想像できる。表面上は丸く収まった様子だが、岸田の腹の中は煮えくり返っていてもおかしくないんじゃないか？」

なんとも言えない衝撃が次々に襲い掛かってきて頭が混乱してきた。とりあえず情報をメモして事の真偽は後々確かめるとしよう。

「そんなことがあったのか。そこに乾が絡んで無かったのが唯一の救いだな」

それとなく乾の話題に持っていく。

「乾は岸田の味方をしていた。白黒ハッキリっていう性格の乾のことだから岸田の方に大義があった、つまり凡を奪われた、と思うのが自然だ。お互いの休日にあたみに会っているみたいだから岸田と乾の関係は良好なんだろう。そもそも八方美人タイプの大久保と合うとは考え難いしな」

岸田と乾の関係については先程岸田自身に聞いていたので問題ないが、他人の暗部を詮索しているようで気が重くなる。

「それにしても凡がそんなプレイボーイだったとは驚きだな、女性に対してそんなに積極的なタイプには見えなかったけど」

「どっちも女の方からすり寄ってきたんだ。目当ては、これはお前も思いつくだろう？金だよ。その当時OLとして働いていた岸田にしても、現在も事務として働いている大久保にしても収入なんてたかがしれている。凡も外見は悪くはないが、それよりもっと魅力的な付加価値を持っている。そして何より凡は優柔不断な男だ、誘われて断りきれなかったっていうのが実情だろう」

凡と話したときに聞いた『実力で手にした物なんて一つもない』という言葉と寂しそうな横顔が頭をよぎる。この一連の出来事を思い出しての発言かもしれない。

「そうなのか。そういえば乾は今何をしているんだ？」

「テニスクラブのインストラクターをしている。覚えていないかも

しれないが乾と宇野はスポーツ推薦入学だろ。宇野は現在草野球程度だが乾はまだ未練を残しているようだ。けど、付き合っている彼氏もいるし結婚したらママさんテニス程度になるんだろうな」

なんだかしんみりした様子で話す。もしかしたら三木は乾に好意を寄せているのかもしれない。乾からしたらこういうタイプは即座にお断りっていうことになるのだろうが、恋愛は何が起こるか判らない。『恋は思案の外』っていう言葉もあるくらいだし。

三木の話と今俺が手にしている情報とを照らし合わせてみても宇野と乾の関西勢は順調そうだな。まあ三木も知らない事実が隠されているのなら別だが。

これで一通りの話は聞けたので後は真偽を確かめに行くか。

「乾に彼氏か、良い事だな。それはそうと、お前が俺や芝井の近況まで知ってるなんてびっくりしたよ。何でそこまで詳しく知っているかは敢えて聞かないようにするけど、お前も法学部出身なら判っていると思うが、法を犯すようなことだけはしないでくれよ」

立ち上がって刑事の威厳を示すように三木の顔を見下ろす。三木は「わかってるよ」と無愛想に返事しながらまたビールに手を伸ばした。

変わらないのか変わってしまったのか掴みどころの無い奴だ。ため息一つ付くと宇野、大久保、凡が集まっているのを見つけたのでそちらへ歩を進めた。

パーティー2

足音で気付いたのか、宇野が俺を見るなり「おおー」と声を張り上げ手招きしてきた。皆がこちらを振り向いているんじゃないかというくらいの声だったので何だか気恥ずかしくなりつつも輪の中に入っていた。

「ちょうどお前らの話をしたところやねん」

「お前ら？」

「お前がさっきまで座つとったグループの話や」

「というと、左から順に三木、俺、芝井、か。」

「何か黒い負のオーラが流れてて三羽のクラスがおるみたいやつたで」

本気とも冗談とも取れる言い方で揶揄する。

「で、そのカラスの何が話題になっていたんだ？」

皮肉を皮肉で返す。こういう手法も手馴れたもんだ、いつも芝井に鍛えてもらってるからな。

「新田君って刑事になったんだってね。知らなかった、すごい」
大久保が取って付けたような賛辞を述べる。俺が刑事だということとはみんな知っていると思っていたが、知らない奴もいるんだ。まあそれ程有名じゃないってことだな。

「それで三木と芝井は何やってんねやろうか、って話をしたら丁度お前がやって来たうちうわけ。で、あいつら何してんの？」

宇野にとって今俺はカラスではなくて伝書鳩に見えているかもしれない。別に隠すほどのことではないので概要だけさらっと言っておく。

「三木については俺もたった今聞いたとこだから詳しいことは知らないけど、現在は求職中だそうだ。芝井は事務所を構えて探偵をしている」

「探偵!？」

みんな目を丸くして驚いている。如何に予想外の事だったかは、さつきまで無言を通していた凡までもが声を発したことで判る。

あれだけの大声だ、芝井にも確実に届いているはずだ。どんな顔をしているか振り向いて確認したい衝動に駆られながらも、平静な顔をしてウーロン茶を飲んでいる姿を想像して笑ってしまう。

「探偵か、堅気やないとは思ってたけど、まさか探偵とは驚きや」

宇野が驚き顔のまま、息を吐き出すように呟く。

「とても儲かっているとは言いが腕利きの探偵だ。俺も色々と知恵を貸してもらっている」

「おつ、癒着か？」

「またも宇野が絡んでくる。」

「報酬を払っているわけじゃないから癒着とは程遠い。というかそういう色眼鏡で見られるのは不愉快だ」

別段腹を立てたわけではないが偏見を持った発言に不快感を示した。宇野は「すまんすまん」と笑いながら俺の肩を叩いて空になった皿を片手に料理があるテーブルの方へ歩き出した。あいつ、やけに絡んでくるな。

「新田君は結婚してるの？」

主導権を握っていた宇野がいなくなったことで開放されたのか、今度は大久保が話し始める。

「いや、ままだよ。仕事がハード過ぎてそれどころじゃない」

結婚できない奴が使用する言い訳第一位であるう台詞を苦笑と共に吐き出す。大久保は「そうなんだ」とだけ言い、少しの間沈黙した。これは俺が話の主導権を握るチャンスかもしれない。

「それで大久保は今」

何をしてるんだ、と続けたかったのだが、それをさせてくれなかった。

「私たちね」

大久保が俺の発言を遮った後、凡の腕を抱きかかえるように接近

し、

「結婚するの!!」

結婚、という言葉に強烈なアクセントをつける。まるでみんなに知らしめるかのような大声で。

周りは静まり返っている。凡と大久保以外の人は俺の背後にいるため表情を確認することは出来ないが、とても二人を祝福するような空気ではない。ピーンと張り詰めた冷たい雰囲気は部屋全体を覆っているような感じさえして寒気を覚える。

「そうか」

かろうじて発することが出来た言葉は弱々しく、とても暗い雰囲気を吹き飛ばすことは叶わなかった。

少し間が空いたところで凡が大久保の腕を振り払うように立ち上がり「少し風に当たってくる」と言い残し、テラスへと向かった。

「照れてるんだよ」と大久保は笑顔で答えているが、去り際の凡の表情を見る限り疑問を呈さざるを得ない。

何の収穫も無いまま俺と大久保だけになってしまった。しかし、大久保の性格と今までの言動からして信憑性のある情報を得ることができるかどうか。否、と即座に判断し「飲み物を取ってくる」と言ってそそくさとキッチンへと消えることにした。

はあ、何か疲れたな。こそこそと情報収集するのもそうだが、学生時代の雰囲気とは程遠いことが悲しかった。

「ほれ、飲み物取りに来たんやろ?」

顔を上げた瞬間、缶ジュースが目の前で宙に舞っていたので慌てて両手でキャッチする。が、フアンブルしてしまいゴトツという音を立てて床に落としてしまった。缶を取り上げてから視線を移してみると、乾が目の前に立っていた。

「これぐらい取ってや。歳取ったなあ、新田は」

爽やかな笑顔を見せて皮肉る。

「俺は頭脳労働専門なんだよ。これ、サンキュー」

落とした際に凹んだ缶ジュースのプルタブを開け、一気に半分ほ

ど飲む。乾はみんなの苗字に「君、さん」をつけず、あだ名さえも口にしない。そう言うとか尖った印象を受けるかもしれないが、違和感無く受け止められるのは乾が姐御肌的な要素を多分に持っているからだろう。

「俺が飲み物取りに来たこと、何でわかったんだ？」

「小さな部屋やと何処に居たって聞こえるもんよ」

乾も缶ジュースを手に使っていた。俺のボソツとした声までも拾っていたとするなら。

「お前、凡と大久保が結婚すること知ってたか？」

そう言うのと、露骨に厳しい表情に変わる。

「あの子はどれだけ良く言い表したとしても女狐つてとこやな。何がっていうことは言わんけど、今思い出しただけでも胸くそ悪くなる」

鋭い眼光はそのままに、吐き捨てるように話す。思い当たる節はあるのもう少し掘り下げてみよう。

「岸田の事か？」

「何や、新田も知ってたん？最初はあの子も二人の事を応援してたんよ。しばらくして順調にいつてる事に妬いたんか知らんけど、急に翻意して潰しにかかってきたんや。まあ今となってはその応援も嘘っぱちやったってことやけど。佐藤も同罪や、何もせず黙ってるだけやったんやから。そんな時のあの子の勝ち誇った顔を新田にも見せてやりたかった。いつそ殺したるか、とさえ思ったわ。あつ、刑事の前でこんな話したら逮捕されてまうか」

しまった、という感じで頭を搔く。

「言っただけでは逮捕されないことぐらい判ってるだろ。けど、そんなことがあったんだな、何かみんな変わってしまったて寂しくもあるな。お前が変わってないことがとても嬉しいよ」

しみじみ呟くと、乾は笑い出した。

「新田、それは違うで。みんな変わってない、学生時代のままや。あんたは学生の時ホンマの本気でその人の心ん中を覗いたことある

か？どんだけ良い人ぶってても、ふとした瞬間にボロが出る。逆も然りや。結局のところ、あたしらは単なるクラスメイトやったってことや」

しれつとした顔で肺腑をえぐるような言葉。以前から齒に衣着せぬ発言をしていたが、衝撃的な言動に言葉を失ってしまう。それを見た乾はおどけた顔をして続ける。

「驚いた？テニスしかできへん女がこんなこと言うなんて。けど、テニスは心理戦でもあるんやで。どのコースにどんな強さで打つか、ストレートか回転をかけるか、相手の足はどちらに重心を置いてるか、どんな表情か。言ったらキリが無いくらいの情報を的確に処理せな勝たれへん。言うなれば職業病みたいなもんや、普段生活してても無意識のうちに相手の細かい動きまで見てしまう」

まだ言葉が出ない。顔が硬直したままで埴輪みたいになっているのが自分でも判る。

「何やねん、カッチカチの彫刻みたいになって。惚れたか？あかんあかん、あたしは今彼氏とラブラブなんや。新田のことは嫌いやないけど10年遅かったな」

「誰が惚れるか。お前と付き合ったら尻に敷かれっぱなしで直ぐにペチャンコのペラペラになってしまう」

「あはは、そうなるやろな。何かしらスポーツに熱心な人は少なからず気が強い人多いから」

軽口を叩き合い、二人で笑った。

「今日は会えて本当に嬉しいよ。お前の哲学には反するかもしれないけど、今日見た乾は俺が知ってる学生時代の乾そのものだ。何も変わらない、真っ直ぐな瞳をしたあの時の」

と言ったところで乾が話を被せてくる。

「あほ、感謝したいのはあたしの方。今日はあんたと芝井に会いに来たようなもんや。あんたらまでフニャフニャしとったら、二人ともバッシバシにシバいて帰ってるとこや。良かった、ホンマに」

語尾が詰まり、顔を背ける。表情は確認できなかったが頬にキラ

りと光るものを見た。涙？

しかしクルリとこちらを振り向いた時にはあの頃の、心の中をさらけ出しているかのような爽やかな笑顔だけを残していた。そしてジュースを飲み干した後、すれ違い様ポンと俺の肩を叩いてキッチンを後にした。

今日ここに来て初めて良かったと思えた。フツ、と自然と笑みがこぼれるとともに、芝井とはどんな話をしたんだろうと考える。男っぽい乾とは意外と話が弾んでいるかもしれない、後で聞いてみよう。

キッチンを出ると少し前飛び出した大久保の結婚発言の余波は無く、みんな思い思いの場所で寛いでいる。テラスの方を見てみると、まだ凡が一人佇むように立っていた。空を見ているのだろうか、部屋を背にして上を向いている。

みんなの近況は聞けたけど、凡の様子については判らないままだ。今一人でいるのなら直接聞くチャンスだ、ここは直球勝負で本人から聞いてみよう。

窓を開けた途端冷たい風が吹き付けてくるので急いで窓を閉める。夏休みの時風景を楽しみながら読書していた長椅子を横切り、角にいる凡に「よお」と声を掛け、隣りに立つ。凡はこちらを一瞥しただけで、再び遠くを見つめる。

「外はまだ寒いな。けど草木はだんだん色付いてきてるから、春はもうすぐつてとこか」

テラスから見えた光景を眺め感想を述べる。ひゅう、という風の音だけが耳を通り抜けた。

「元気無いな、そんなに会社の状況が悪いのか？」

この発言にはすぐ反応し、パツと俺の顔を見た。

「誰に聞いたんだ？そんなこと」

「誰ということでもないけど、そういう話題が出たからさ」

敢えて固有名詞は避けた。これ以上無用の争いはごめんだ。しかし凡は勘付いているみたいで、ふん、と鼻を鳴らした。

「どうせ宇野の奴だろ。学生時代から何かつていうと絡んでくるからな、あいつは」

「で、実際はどうなんだ？」

ここから核心に入るので自身の発言も慎重に運ばねば。自然とこちらまで険しい表情になる。

「業績が下がっているのは事実だが、今すぐどうこうという問題じゃない。しばらく新しい設備投資と従業員の新規採用を見送り、既存の勢力で小回りを良くしていけば乗り越えていける。あいつは俺が何でも持っていると勘違いして妬んでやがる。全く、はた迷惑な話だ」

苦虫を噛み潰したような顔で吐き飛ばす。その表情や口調は悪意に満ちていた。おいおい、まだ隠された確執があるんじゃないだろうなと、さらに気が重くなる。

「そういえば今日は俺にも絡んできたな、機嫌は良さそうだけど」

「あいつはエリート意識や権威を持った奴を毛嫌いするんだ。宇野の家は裕福とは程遠くて、大学だってスポーツ推薦で学校からの補助金が出なかったらとても通える資金は用意できなかっただろう。その影響か、金や権力を持っている奴に対して執拗なまでの敵対心を燃やしている。今は営業の仕事をしているみたいだな。学生時代から努力して今の地位を築いてきたのは評価できるけど、ああいう接し方には辟易するよ」

「つまり俺たちは宇野に好かれていない、と？」

「むしろ嫌われている、と言った方がいいかもな。俺は親父の七光りだけでエリートコースに乗っかっているボンボン、お前は民間人には無い特別な権力を行使できる刑事だからあいつに嫌われる範疇に当て嵌めると、ストライクゾーンと真ん中だ」

随分と自分を卑下した発言、『実力で手にしたものは一つもない』という言葉が再び脳裏を掠める。

「お前も普段から権力を振りかざして暮らしているわけじゃないだろ。たまったもんじゃないよな」

一連の状況から考えると凡は学生時代から言われ続けてきたのだろう。どのような価値観を持って生きるかは個人の裁量に委ねられるが、他人を傷つけることは許されない。しかしお互いの善意悪意に関して明確に判定することは難しい、決して答えは一つとは限らないのだから。

凡について心の重しになっている要因の一つは大体判ったので、もう一つの重しであろう事柄に話題を移そうと話題の変換を試みる。「宇野に限らず公務員は非難の対象になり易い、文句を言われるのは慣れているよ。それにしてもお前が大久保と付き合ってたなんてびっくりしたよ」

一瞬ビクツと肩が動いたが、言葉は発しなかった。

「この前も飴作りの体験に行ったらいいじゃないか。美味しい飴で楽しませてもらったよ」

苦笑しながら皮肉るが、凡は関心無さ気だ。

「あいつが急に「行きたい」と言い出してチラシを見せてくるから行っただけだ。あいつが作っている間、俺は外で景色を見ていたし」「へえ、お前は何味を食べたんだ？」

「いや、俺はその飴自体見ても食べても無いし、そもそも食べるよう勧められてもいない。従って、どんなものを作ったのかも知らない。美味しかったんなら良かったじゃないか」

抑揚の無い声で返事する。俺の冗談を真に受けたばかりか、少しも笑わない。むしろ避けたがっている気配すら感じた。そりゃそうだろう。しかし、聞かないことには核心には迫れない。

「岸田とは後腐れ無く別れたのか？」

またバツと俺の方へ顔を向ける。なぜお前が知っているんだ、そしてどこまで知っているんだ、という疑問が頭の中を渦巻いているような困惑した表情。しかしやがて表情は緩む。

「なんだか尋問を受けているみたいだ。お前が刑事だからといって、その質問に答える義務があるのか？」

「今の俺は刑事じゃない。友人として聞いているんだ」

真っ直ぐ凡を見る。が、俺の視線に堪えられなくなったのか、ゆっくりと顔を背けた。

「お前は」

「例えば」

続けようとしたとき、凡が話し出す。もうこれ以上聞くな、というように。

「例えば、ある人が二枚の色紙を差し出してきて「どちらか選べ」と言ってきたでしょう。一つは青色、もう一つは緑色。でもお前は赤色が好きなんだ。こんな時お前ならどちらを選ぶ？どちらも選ばないという解は無しだ」

「どちらって言われても」

急にそんなこと言われても即答できない。うーん、と悩んでいると、

「それが答えだ」

凡が薄ら笑いと共に呟き、もうこちらを見ることは無かった。

全く意味が解からない。その真意を聞きたいと口を開きかけた瞬間、ガラツと背後で音がした。俺だけが振り向くと、大久保がこちらへ向かって来ていた。

俺はチツ、と小さく舌打ちする。俺の頭の中で質問終了のホイッスルが鳴ってしまったのだ。大久保は十中八九、俺に用は無いだろうから消えるしかない。凡に「またな、元気出せよ」と気休めにもならない言葉を発して背中をポンと叩いた後、踵を返し部屋の方へ歩き出した。大久保はすれ違い様、俺が気を利かせたことに満足したのか、満面の愛想笑いを振りまく。しかし、既に様々な情報を得ている俺には全くと言っていい程効果は無かった。

決定的な崩壊

部屋の中に入ると、外気との温度差で体をブルツと震わせた。やっぱりまだ外は寒かった、温かい物でも飲みたいな。

三たびキツチンへ足を運ぼうとすると「あつ、そうだ」と凡に言い忘れたことを思い出し、再びテラスへと歩き出す。これはむしろ大久保がいた方が、さらに二人しかない事が好都合な話題。いきさつはどうであれ、他の人がどう思おうと、二人が望んで結ばれるのなら喜ばれるべき出来事であり、祝福の言葉を述べるのはクラスメイトとして当然だ。再び波紋を呼ぶことを避け、二人のみの時に言おうと思っていたのだが、ちょうど今がそれに相応しい場面だ。

またテラスへ出る。鉛色の空から吹き降ろしてくる風は先程よりさらに強くなっているかのように感じた。隅の方へ目をやると二人は寄り添うように並んでいる。やけに接近しているようにみえるが。とりあえず様子を見るように目を凝らして見てみると、彼らは、キスしている最中だった。

それを見た瞬間、すぐさま反転し部屋に戻った。それと同時に非常に不愉快な気分になる。俺も純情な少年時代からは程遠い世代になってしまったので、今さら接吻の一つや二つ目撃したからといって赤面するような歳じゃない。それよりも時と場所を考えろ、と言いたいのだ。大久保の発言でここにいる人がどれだけ不快な気持ちを抱いたのか、凡の優柔不断な態度で岸田や乾がどれほど傷ついたのか。たまたま目撃したのが俺だけだったから良かったものを、これを他の人が見たらどのような気持ちになるのか、少し考えたら判ることだ。それを、何を考えているんだ、あいつらは。

憤怒の表情で三木と芝井の間に座ると、コーヒーを飲んでいる芝井が話しかけてきた。

「どうした？随分とご立腹の様子だが」

俺のことを心配しているような発言だが、そうでないことは芝井

の顔を見れば一目瞭然、笑っているのだから。こいつは俺が怒っている顔が面白くてたまらないのだろう。無邪気な子供のような面を見せる時もある、明晰な推理を見せる時もある。乾の言ったことは正しい、芝井は学生時代から何にも変わっていない。むしろ変わらないうで欲しい、そしてずっと友人でいて欲しい。芝井の低く小さな声が、返って俺を冷静にさせてくれた。

「別に、何てことない。それより俺もコーヒー飲みたいな」

俺の呟きが届いたわけではないだろうが、岸田がコーヒーを運んでくれるのが見えた。そういえば、さっきコーヒーの準備するって言ってたもんな。俺が見たときは途中だったけど、いつの間にかその続きもしてたんだな。

「ありがとう、ちょうど温かい物が欲しいと思ってたんだ」

岸田は微笑みながら俺の前にコーヒーを置いてくれた。目が合うと、何か話したそうな顔をしていたが、少し間が空いて再びキツチンへと歩き出した。

コーヒーが胃の中に運ばれると、こわばっていた体がほぐれていくように力が抜けていく。しばらく無言でコーヒーを口に運んでは一息つきを繰り返し、飲み干した後はその余韻を楽しんでいた。

しかし、やっと体が温まってきたところで急に寒風が襲いかかってくる。視線を移すと凡と大久保が窓を閉め、遠くのソファに向かっているのが見えた。二人が部屋に戻ってきたんだな、自然と顔をしかめてしまうのは先程のことがあるからだろう。

二人が同じソファに座ると思いきや、凡の方は一旦座ろうとした後直ぐ立ち上がり料理の方へ向かった。が、料理には手を付けず何かを探すように辺りを見回している。そこへ岸田がコーヒーを持って凡に近づいていった。凡は少々戸惑っていたが、すぐに気を取り直し微笑みコーヒーを受け取る。岸田も笑顔で応対し、何やら話している。意外と二人の間にわだかまりは無いのかも。このやり取りを大久保はどう見てるんだろうか、と思いそちらの方へ目を向けようとすると、

「何ジロジロ観察してるんだ？探偵ごっこか？」

隣りの三木がふいに話しかけてきたのでパツと三木の顔を見た。のぼせ上がってるように顔が赤くなっていて、大分出来上がっているようだ。

「いや、みんな変わったな、と思ってな」

少し滑舌が悪くなり言い訳がましくなってしまったが、三木は気にしていないようだ。

「変わったか。そうだな、変わったよ。みんな欺瞞や卑しさが隠し切れなくなっているからな」

ククツ、と唇を片側だけ上げて嘲笑うような顔をしている。実に嫌悪感を覚える笑顔だ。それから再びビールのプルタブを開け飲み始めたので俺も顔を背ける。随分捻くれた物の見方をするようになったもんだ、こういう奴と話をして愉快的気持ちになれるわけが無い。

もう一杯コーヒーをもらいに行こうと思い、立ち上がろうとすると、ガチャン、と陶器の割れる派手な音と共に「ぐうう」と人の呻く声を聞いた。反射的に顔を向けると、凡が喉を掻きむしる様に両手を動かし苦悶の表情を浮かべている。異常に気付いた大久保と宇野がすぐさま凡のそばに駆け寄る。芝井も立ち上がりその様子を見ている。不覚にも一歩遅れた俺は大きく息を吸い込み、

「おい、救急車と警察に連絡しろ！」

と大声で叫ぶ。が、皆呆然としているのか、足がすくんでいるのか動こうとしない。チツ、と舌打ちを鳴らしたが、横にいた芝井が備え付けの固定電話に向かって歩き出したのを見て、俺は凡のところに向かう。

凡はすでに倒れて床に這いつくばって、動きも弱々しくなってきた。急いでキッチンへ向かい、コップに水を入れ、抱きついている大久保や体を揺すっている宇野を引っ剥がして、凡に飲ませて吐かそうとする。しかし凡の顔色は生気を失い、ついに動かなくなってしまった。脈を取ってみると、すでに生命反応を感じることは

出来なくなっていた。

駆け寄ってきた芝井に対して俺が首を左右に振ると、その意を察した芝井はうなだれるように俯いた。大久保の泣き声と宇野の叫び声だけが部屋の中に響き渡る、重く息苦しい雰囲気は彼らの声の大きさと比例して、急速に広がっていった。

しばらくすると、彼らの声を切り裂くかのように電話のベルが鳴った。一番近くにいた乾が受話器を取る。最初は神妙な面持ちで話を聞いていたが、急に表情が一変する。

「なんやて！じゃあ、どうするんよ！」

興奮した様子に一同緊張が走る。直ぐに収まったが、受話器を置くと、ふう、と大きくため息をついた。

「どうしたの？」

岸田が怯えた顔で問う。すでに静まり返った部屋で、一身に注目を浴びている乾の表情は硬いままだ。

「暴風雨でここに来れる橋の川が決壊したそうや。それが収まるまでここには来れんそうや」

窓の外を見る。この騒ぎで気付かなかったが、いつの間にか横殴りの雨が窓に打ち付けていた。皆の表情に絶望の色が窺える。

しかし、現状を憂えてばかりはいられない。俺は刑事だ、最善を尽くすのが役目だろう。

「みんな、これからはむやみにここにある物に手出しをしないでくれ。それと勝手にどこぞに行くのも禁止だ」

低い声で皆に言い聞かせる。返事はしないが、俺が刑事だということに一樣に應じてくれそうな空気。現場保存はできそうだな、と安堵する。

「推理小説っぽくなってきたじゃねえか」

横にいた芝井が俺にだけ聞こえるような小さな声で呟く。

「えっ？」

聞こえてはいたが、反射的に聞き返してしまう。芝井は鋭くなった眼光を俺に向け、真顔で答える。

「クローズ・サークルだ」

捜査開始

芝井と二人で凡の遺体を検分していく。額に裂傷があるのは、倒れた際に付いたものだろう。テラスで見たときには怪我した様子は見られなかったし。

「どうだ？」

しばらくして芝井に話しかける。

「毒物による中毒死だろうな」

死ぬ間際の様子と経過をみたら当然の判断だろう。いくら芝井でもまだ情報が足りない過ぎるか。

「なあ、ええか？」

遺体から目線を外して声がした方を向いてみると、宇野が俺たち二人を見下ろしていた。

「新田、お前は刑事やから何やら嗅ぎまわるんは仕方ないとして、芝井が加わらなあかん理由は何処にあんねん？探偵やから、なんて理由にならんへんで。所詮俺たちと同じ民間人であることに変わりはあるへんのやし、芝井が犯人でない、っていう証拠は何処にも無い。捜査や、いうて証拠を隠蔽する可能性だってあるんや」

本日何かにつけて絡んできた宇野が噛み付いてくる。しかし、宇野の言にも一理あるのは否定できない。芝井は天下の名探偵として名を馳せているわけでもなく、いくら今まで俺と捜査協力していたとしても、それは非公式のものであり立場としては宇野たちと変わらないのだから。

しかし、今こそ芝井の力を借りたい。友人が死んだのだ。他の刑事ではなく、俺が、俺と芝井で解決したい。死んだ者は生き返らないが、それをせめてもの弔いとして。そういう思いは強けれど正当性のある理由が思いつかない。

「なんや宇野、探偵役に立候補か？やめとき、器が違いすぎるわ」
声のする方へ目をやると、乾が腕を組んで壁にもたれかかってい

た。その立ち振る舞いが格好良すぎて、一瞬見惚れてしまった。

「その理由を言うたるか？まず芝井は過去新田が関わっている事件に協力していて、さらに解決している実績を持つ。あんたはそんな経験あつたっけ？それにあんたより芝井の方が遥かに人間性に信頼を置くことができる。これはあたしだけでなく皆に聞いたらええわ、答えは出てるやろうけどな。さらに動機っちゅう点で芝井よりあんたの方が怪しい。あんたは何かに付けて凡に絡んでたなあ、もしかしたらあたしら知らんような確執があつたんかも。芝井は凡と仲が良かったというわけでもなかったけど、決して悪くは無かった。さつきあたしと話したとき卒業してから会ってないって言うてたけど、例えばそれが嘘やったとしても、そんな嘘この天気が収まって新田がちよっと調べれば簡単に尻尾つかんでまうわ。そうなれば一気に芝井は有力容疑者の一人や、証拠の隠蔽が成功したとしても。そんな素人でも判るような嘘わざわざ付くはずないやろ。最後に」

乾は不敵な笑みを浮かべる。

「『ズッコケ刑事には名探偵』がつきものやろ？あんたと芝井のどっちが探偵向きかなんて言うまでもないわ」

宇野と乾が睨み合うが、やがて自身の不利を悟ったか、宇野は舌打ちを鳴らしソファへ座った。乾は芝井に目配せすると、芝井は苦笑いをして応じた。

「おい、何でお前が『名探偵』で俺が『ズッコケ刑事』なんだよ。お前何か吹き込んだんじゃないだろうな？」

肘で芝井の腕を突きながら口を尖らせて抗議する。

「見たままじゃないか、俺は何にも言うてない。ほら、乾がくれたチャンスが無駄にすることはできないから早く始めるぞ」

俺に手を差し出して手袋を要求する。渋々手袋を渡すと俺も手袋を嵌めて捜査に取り掛かるとした。

「新田、最初に凡の所持品と遺体周辺を調べよう。俺は周辺を調べるから、お前は所持品を調べてくれ」

芝井が提案してきた。別に突飛な案ではないので素直に従うこと

にする。遺体に手を合わせてから、作業に取り掛かる。

「ごそごそと背広やズボンのポケットを探った。ハンカチ、キーケース、名刺入れ、財布、携帯電話、ボールペン、手帳などを取り出し机の上に並べる。見たところ外観的に不自然な点はない。芝井の方を見ると、床に這いつくばり目を凝らして何かを探しているようにキョロキョロしている。」

「何探してるんだ？」

話しかけると、芝井はスツと立ち上がりズボンに付いた埃を払う。

「ああ、別に。そっちは？」

「一応所持品は全部出したけど」

机を指差す。芝井はそれらを手に取り中身などを確認している。

何か怪しい点でもあるのだろうか？一通り確認し終わると、うんうん、と何度も頷いている。

「何か変なところでも見つかったか？」

「たまらず尋ねる。」

「いや、今のところ不自然な点は見当たらない。従って、これだけの可能性が極めて低くなった」

「可能性？」

首を傾げてしまう。俺には何にも閃かない。

「自殺だ。今日の凡の様子を見て真っ先にそれを疑ったよ、随分と塞ぎこんでいるようだったからな。しかし自殺なら毒物を保管する容器が無ければならない。所持品にも該当しそうな物があるが、細工した様子は見られない。後はその辺に転がっている可能性だが、それは俺が確認して否定された。残されている可能性は自殺した後混乱に乗じて何者かが容器を持ち去った、ということだが、それは今の段階では確認することができない。これが自殺説の残された可能性かな。詳しい調査は必要だが、現在の方向性としては、殺人事件、と捉えて問題ないんじゃないか」

そうか。人が死んだ、イコール殺人とは限らない。様々な事件を扱っている中で不覚にも先入観を持ってしまった。そこへいくと芝

井は冷静だ、様々な情報を的確に捌き、徐々に焦点を絞っている。勉強になる、と羨ましがってもいられない。いつかは俺もその域に達し、追い越さねば。

「そうだな。とりあえず自殺説あるいは病氣説は保留にしておいて殺人事件に絞ろう。となると残念だが、当然この中に犯人がいることになる」

どんよりと黒い分厚い雲が心の中を支配する。

「お前は公僕だ、私情を排さなければならない。まあ心の弱いお前のことだ、一つアドバイスをしよう。知人を捕まえる、とは考えるのではなく、凡を弔ってやる、と考える。このような状況になったのは悲しいことだが、凡のために最善を尽くすんだ」

ネガティブに考えるな、と言いたいのだろう。頭では判っているのだが。

しばしの間お互い無言になる。芝井は今後の動きについて考えているのだろう、俯きながら難しい顔をしている。俺は俺で気持ちを切り替えようと自分自身に言い聞かせていた。

「なあ、作業を分担しないか？」

またも芝井の提案。

「分担って？」

「俺は遺体、その他毒物使用の経路から調査。お前はここにいる知人たちの話を聞いて事件発生の人動きや動機面からの調査」

なるほど。天気が好転し、決壊していた橋が復旧すればそこでタイムアップなので、効率良く動くのは理に適っているし、聴取の方は俺向きの作業だ。宇野は先程芝井の捜査介入に異を唱えており、芝井が聞いたのではまともに相手にしないだろう。俺は刑事だし、何よりも宇野自身が『新田は刑事やから（捜査するのは）仕方が無い』と認めている。嫌々でも協力はしてくれるだろうし、他の人も同じ気持ちだろう。

「そうだな、じゃあ二手に分かれよう。作業が終われば此処に戻り、お互い得た情報を交換し合う、でいいな？」

たまにはこちらが仕切らなければ俺の沽券に関わる。命令口調で指示するが、芝井は気付いてくれないのか「よし」と一言発しただけでスタスタと現場へと歩き出した。

俺も一歩遅れて聴取へ向かう。誰を見ても視線を合わそうともしない、不安なのか演技なのか。『私情を排さなければならぬ』、芝井の言った言葉を噛み締め、最初のターゲットと見定めた乾の方へと歩を進めた。

ホワイダニットからの捜査1

「乾、ちよつといいか？」

キッチンへ来るように手招きする。固有名詞を出したのに、本人はもちろんほぼ全員俺の方へ顔を向ける。どこにいたって声は聞こえてしまうのだから、姿が見えない分話し易いだろうという配慮は無意味なのかもしれない。が、最善を尽くす、を実行する。呼ばれた乾はキビキビとした動きでキッチンへ入ってきた。

「なんや、犯人探しか？」

よく通る声、比較的明るい表情で問いかけてくる。

「やりたくないけど、そういうとこだ」

対照的に低いトーンで返事した。

「あんたはあんたの仕事をすればいい。それがクラスメイトを逮捕することやったとしても、憎まれるべきは犯人であってあんたやない。自分の仕事に誇りを持つてるんやったら、そんなこと言うてんとシャキツとしいや」

腕をドンと叩かれた。こいつは俺より刑事向きだ、苦笑しながら乾と目を合わせると同時に、そう言ってもらえる感謝の気持ちがいまわってくる。切り替えなければ、俺が犯人を捕まえるんだ。どう転んでも悲しい結末が待っているとしても。

「凡が死んでしまった、ということに何か心当たりは無いか？」

「最初に浮かぶのはやっぱりあの三角関係やな。そうなると久美が犯人ってことになるんやるか？」

「そんな早計に結論は出せないよ。とりあえず集めれるだけの情報を集めてからでないと。とりあえず思いつくだけ話してくれないか？」

言われた乾は指を顎にあてて「うん」と小さく唸る

「じゃあ、一人ずつ名前を言っていくから、その人と凡に関することについて話してくれ、そっちの方が思いつきやすいかも」

俯いていた乾も顔を上げ「そやな」と返事したので、その方向で話を進めていく。

「三角関係の当事者の一人、岸田についてはひとまず措いておこう。お前も言つてたように動機じゅうぶん、と判断されるだろうし。まづはもう一人の当事者、大久保からいこうか」

「希望とは、その事があつてから一度も会つてへんから判らんよ。けどあの娘の場合は、自分が思つてゐる通りになつたんやし、結婚するとかつて言つてゐるんやから佐藤を殺すような動機はないんやない？」

確かに大久保を積極的に疑う理由は無い。ただひつかかつているのは大久保に対する凡の態度だ。きょうの凡はみんなに対しても素っ気無かったが、それは大久保にしても同じだ。決して結婚を約束した男女のそれには見えなかった。まあ意識的にベタベタしないようにした、と言われればそれまでだが。

「そうだな。次は、三木について」

「三木なんて、希望より判れへんわ。卒業してから一回も会つてへんのに。って、ちょっと待つて。そういえば佐藤と会つたとき一回だけ三木の話題が出たな。何かあいつに貸しがあるとか何とか、その場にはあたしの他にも久美とか宇野もおつたから聞いてみたらええ」

早口なので大幅に省略して書き写す。貸しか、他の人が覚えているといいけど。この他に考えてみると、やたらとみんなの私事に詳しい、ということが挙げられる。合法なら構わないが——もうすでに微妙なラインだが——、例えば違法な手段で情報を入手していたところを凡に見られて凶行に走つた、あるいはそれをネタに強請られていたのが我慢できなかった、とかいう構図が考えられる。

「よし、それは後で確認する。次は宇野だな」

「宇野も怪しいっちゃあ怪しいけど。卒業後もたまにあたしら会つてたんよ、あたしらつて二人でじゃないで。あたし、久美、希望、佐藤、そして宇野。会つたびに嫌味言つてたからな、佐藤の一挙手

一投足全てが気に入らんみたい。最初は佐藤も言い返してたけど最後の方は諦めてたみたい、そういう話題になるとスツと立ち去ってたわ。あたしかて毎回会ってたわけやないから、あたしがおらんときに何かあったんやったら知らんで」

俺も何かと噛みつかれたが、凡とはレベルが違うようだ。しかし、これが動機とは考え難い。それなら溜まりに溜まった鬱憤を晴らすのは凡の方だ。考えられるのは宇野が凡の殺意に気付いて返り討ちにした、ぐらいか。

「わかった。最後に、お前はどうか？」

「どうって？」

眉間にしわを寄せながら聞き返してくる。

「お前は凡に対してどういう感情を抱いていたかってことだよ」

「別に何にもないわ、好きでも嫌いでもない。込み入った感情なんて起こらんぐらいの、クラスメイトの一人や」

聴取に入る際、最初に乾を選んだのには理由があった。乾はこの中で立場、性格、状況ともにこちらの信頼に堪える人物だ。乾の言を基礎にして組み立てていくことで効率的に話が聞けるのではないかと考えたのだ。聞けた内容が役に立つかどうかは捜査次第だが満足できる結果を導き出せてよかった。つまり、乾は信用できる、ということだ。乾と岸田の仲が良いのは知っている。だが乾はその岸田すらも犯人ではないか、と疑った。こちらからは何も言っていないのに。それは、中途半端な感情に流されず、中立的な立場を保っているということを示唆している。もちろんそれを意識しての発言——俺を騙すため——だった、と捉える事もできるが疑いだしたらキリがない、そういう兆候が見え隠れしたらその都度軌道修正すれば良い。

「そうか、ありがとう。そういえば、乾は凡が倒れたときの状況覚えてるか？」

「状況？」

「凡が倒れる前後に、誰が何処にいて何をしていたかって判るか？」

また聞き返された。俺つてもしかして説明下手なのかもしれない。再度唸っている乾をよそに、些細なことで俺も唸っていた。

「倒れる前は、久美と佐藤以外はみんなソファや椅子に座ってたんじゃないかな。久美は佐藤と話した後キッチンへ行って、佐藤はそのまま料理の前。悲鳴を聞いた後はよく判らん、あんたを含めてみんなバタバタしてたから」

まあそんなところだろう、というかよく観察している方だ。俺も凡が倒れる寸前までの様子は大体わかってるし、乾の話とも合致している。倒れる瞬間は見る事が出来なかったが、それも乾の発言で補完された。最後に凡に近づいたのは岸田、その他は全員座っていた。

倒れた後はどうだっただろう。ほとんど同時に大久保と宇野が介抱していた、三木と乾は判らない。ここらは直接本人に聞こう。キッチンに誰もいなかったのは俺自身が確認しているので全員がワンフロアに集まっていた、誤魔化しは利くまい。

「ひとまずここまででいいよ、ありがとう。ああ、そうだ。芝井を捜査に入れさせてくれて助かったよ。なんと言っても、乾真佐子曰く『名探偵』のお墨付きだからな」

「ははは、気にしてんのかいな？新田には新田のええ所がある。そこを伸ばしたら、きっと良い刑事になるよ、あんたは」

満面の笑顔でじつと眼を見つめてくる。何だか気恥ずかしくなるが、ありがたい言葉だ、素直に受け取っておこう。

次はこの話の整合性確認だな。よし、と勢いづいて立ち上がると乾が話しかけてくる。

「新田、犯人捕まえや」

「当たり前だ。『ズッコケ刑事』の底力を見せてやるよ」

親指を立てて返事をする、乾の笑い声を背中に受けてキッチンを後にした。

ホワイダニットからの捜査2

キッチンを出て辺りを見回した。目線を合わせないのは先程と同じだが、乾との会話は間違いなく聞こえていたはずだ。クラスメイ
トが死んだというのにこの余所余所しい感じ、自然と俺の心を冷
静にさせる。もう遠慮なんか要らないんだ、と。

「なあ新田、コソコソせんとみんないつぺんに聞けばええやないか。
そっちの方が早いやんけ」

宇野が立ち上がった近づいてくる。

聴取は早い遅いで解決する問題ではない、他人の存在が——その関
係が緊密であればあるほど——真実を語りたいという意識をかき乱
してしまう。一箇所に集めて一緒に、というのは極力採りたくない
下策。しかし、状況が状況だ。しかも宇野の提案、一蹴してしまう
とこの後の捜査に影響を及ぼしてしまうかもしれない。

「そうだな、話の整合性を確認したいだけだし」

と返事し、やり取りの様子見していた皆を手招きした。ここは涙
を飲む、疑問点は再度個々から聞き出すしかない。

「え、椅子を動かすことは出来ないの？ 立つての話で申し訳ない
が、事件のことについてみんなの意見を聞きたいんだ」

話を切り出すと、唯一ソファに俯いて座っていた大久保がハンカ
チで目を押さえながらも立ち上がるうとしたが、俺はそれを制して
座らせた。目の前で恋人が死んだのだ。今でこそ落ち着いているが、
その心情は察するに余りある。とりあえず現時点では大久保には話
を聞いてくれているだけでいい。大久保に限らず、皆に配慮するこ
とは当然のことだし、この対処には皆納得してくれるだろう。その
証拠に誰も異論を唱えることは無かった。手帳を取り出し、準備を
してから話始める。

「まず、凡が死ぬことになってしまった理由について、何か思うと
ころはないか？」

フロアに沈黙が走った。はあ、予想通りだ、この状況で他人の神経を逆なでするようなことを言えるわけが無い。動機に関しては今回は諦めよう。

「まあ、俺としてもある程度情報は掴んでいる。何か気付いたこと、或いは話したいことがあれば、いつでもいいから話し掛けに来てくれ。次は凡が倒れる前後、何をしていたか。これは個々に聞いていく、まずは宇野からいこうか」

呼ばれた宇野は、顎に指を当てて少し考え込んでいた。

「ずっと座ってたんちゃうか、倒れる前は。外から部屋に入ってくる凡を目で追ってたっていう記憶があるし。倒れた後は直ぐに駆け寄って介抱してたな、これはみんな見てるやろ？」

そう。宇野と大久保の動きは、どちらとも目立った行動をしていなかったから比較的断定し易い。特に大久保の方は凡と共にいる時間が多かったので頻繁に俺の視界に入っていた。

「それは俺も覚えてる。じゃあ次、岸田はどうだ？」

ペンを走らせながら岸田へと振る、本題はここからだ。みんなの視線が岸田へ注ぐ。

「私は、キッチンでみんなにコーヒーを飲んでもらおうと準備してたわ、もちろん凡ちゃんにも渡したよ。その後は、またキッチンへ戻って洗い物を。みんなの声がした後はキッチンを出て様子を」

声が小さく、語尾が聞き取り難いが内容は把握できた。俺が凡とテラスで話していたときはキッチンにいて、倒れた後はキッチンから出て様子を見てた、か。確かに前後とも俺の周りにはいなかったように思う。いた場所に違和感を感じないが、岸田には違うところで疑問点が存在する。岸田がコーヒーを準備し始めたタイミングはかなり前、俺が二度目にキッチンへ入ったときだ。そこで一旦投げ出すように――俺の存在が邪魔だったのか？――キッチンを後にしている。ここは留意しなければいけない点でもある。

「なるほど、じゃあ最後に三木は？」

顔を向けると、いつの間にか床に座っていた。だいぶ酔いが回ってきている様子で力の入っていない感じでダランと首をもたげている。もう一度「三木！」と肩を揺らすとゆっくりと顔を上げた。

「俺は何もしちゃあいねえよ、ずっと座ってたもんよ。」

酒臭い息を吐き出したと同時に話すのが面倒になったのか、だんまりしてしまった。

一番怪しいのはこいつだが、やけに皆の近況を調べているし、乾の話では凡に『借り』があるということだった。しかし、まともに行動することができるのかどうか。演技している、という可能性もあるが。

「大丈夫か、おい。だめだな、こりゃ。まあ、大久保と三木はもう少し落ち着いてから聞くことにしよう。みんなもありがとう、また何かあったら話を聞かせてくれ」

そう言うつと、各々さつき座っていたソファや椅子に座りだした。

三木は座り込んだままだったので腕を抱え込んで俺の隣りに座らせた。

「よいしょつと。なあ、眠ってしまう前に一つだけ聞いておきたいんだけど」

再び肩を揺さぶって三木を無理やりこちらの方へ向かせると、「ああ？」という言葉にもならない返事で今にも瞼が閉じてしまいそうだ。

「お前、さつき俺に嘘付いただろ、卒業以来凡と会ってないって。けど会ってたんだろ？凡に借りがあるみたいだけど、それは何だったんだ？」

「そんなこと言っただけ？借り、借り、金のことか。ちよつと50万ばかり借りてるんだよ、生活困つてるときに。返せ返せつてうるさかったけど、もうちよつと待ってて言っただよ。50万で人を殺しやしない、そんな割りに合わない」

それつが回っていたが耳に神経を集中させて聞き取った。なるほど、凡と三木の間には金銭貸借があったのか。これも動機としては

十分だ。こういう場合金銭の多寡は問題ではない、貸し金が少なくても厳しく取り立てる者もいれば、高くてものんびりしてる者もいて、それは借り手にも言える。『返せ、とうるさかった』と三木自身が言っている以上、凡の取立てを疎ましがっているのは確かだ。『わかった、ありがとう。お前、もうこれ以上酒飲むんじゃないぞ』肩を叩いて立ち上がると、三木は聞こえているのかいないのか口をモゴモゴさせていた。

一歩踏み出した途端、芝井が目の前を横切ったがまだ捜査を続けている様子。こちらもさつき聞きそびれたことを聞いてから合流しよう。

「少し、話いいか？」

キッチンの椅子に腰掛けていた岸田に話しかける。乾と向かい合うように座っており、俺が声を掛けると同時に乾が席を立とうとしたが、岸田が乾の袖を引つ張ってそれを止めた。

「ああ、岸田がいつて言うなら乾もいてくれて構わない。別にこそこそ話すような話題でもない。けど助言なんかは挟まないでくれよ」

これは表向き乾に対して言った発言だが、実は岸田に向けての注意勧告だ。岸田は乾を頼りたいのだろうが、それは無しだ、と釘を差す為の。

「少し気になった点があったんで確認したいんだ」

話を切り出すと岸田は身構えるような表情で目つきに不信感が漂う。

「俺がコーヒーをもらったときは凡が倒れる少し前だったけど、岸田は、そのずっと前からコーヒーの準備をしてたよな？けどコーヒーを運んだのはだいぶ後になってからだっただけ」

「別になんてことないよ。みんなが料理を食べて一息ついてから飲んでもらおうと準備したんだから」

俺の言葉を遮るかのようにまくし立てる。俺の質問がわかっていたかのような切り返しは逆に怪しい。

「なるほど。俺がキッチンで岸田と会ったとき、何か驚いてなかったか？俺の顔を見たときハッとした感じを受けたんだが。それとも一つ、その時お前はまるで準備するのを放棄するかのようにいそいそとキッチンを出て行ったよな？その証拠にコーヒークップやコーヒーの瓶は中途半端に出しっ放しだった」

岸田の目を見る、萎縮した様子も乾に助けを求めるような素振りも見せない。

「何を言いたいのかわからないけど、それは新田君の邪推だよ。あの時は確か、料理を食べに行っただよね。私、思い付いたら何も考えずに動いちゃうタイプだから。それに、何の音もなく急に声掛けられたら誰でも驚くよ」

はにかみながら答える。前にも見せたあの時のような笑顔、のだが不自然な点は拭えない。驚いた顔と、中途半端な状態でキッチンを後にした意味。

「邪推は誤解だよ、俺はただ真実が知りたいだけだ。友人のために犯人を捕まえたい。一人の刑事として、一人の男として。まあ俺の意気込みなんかはどうでもいいな。ありがとう、参考になったよ。また何か気付いたことがあれば気軽に話しかけてくれ」

頬を緩め、礼を言いながら立ち上がると、岸田もホッとしたように息をつき笑顔を作った。去り際乾と目が合い、口がパクパク動いていた。その動きを読み取ると、「が」「ん」「ば」「れ」「よ」か。最後の「よ」が「や」かもしれないが。乾は芝井よりよっぽど俺の方が心配らしい、まあ扱いも全然違うし仕方が無いが。

最後は宇野だな、見渡すまでもなく視線の先のソファでふて腐れているように腕を組んで座っていたので早速声を掛ける

「今、いいか？」

ゆっくり顔を上げ、睨むように俺の目を見る。俺、何かしたか？

「単刀直入に聞くけど、お前、凡のことを憎んでいたか？」

「はあ？何でそんな事聞くんや？」

「今日のお前と凡とのやり取りの感じでそう思ったただけだ。それと、

俺と話するときも刺々しい様子だったし」

「別に、憎いとも何とも思つたらん。もちろんお前のことも。第一、仮に俺が凡のこと嫌つてたとしても、嫌な思いをしてるのは凡の方やろ。そしたら殺されるのは凡やなくて俺の方や」

俺もそう思っている、この動機では殺される相手が違う。

「しかし、お前も殺したいほど憎んでいた可能性はある。凡に何かにつけて文句を言つてたみたいだし。それと、凡の堪忍袋の緒が切れてお前を殺そうとしている状況を逆手に取った可能性も」

「ははは、ええ加減にしいや新田。何でそこまであいつを恨む理由があるんや？学生時やつたらともかく、今の俺は成功してるんや。

時計も、車も、家も買える。あいつと肩を、いやその先を行くんや。それに、今日も凡とはいつもの感じやった。仮に凡が俺を恨んでたとしても、今日凡とはほとんど話してない。俺を殺したかつたら、少しでも接触してくるんちゃうか？そこらへんはどう考えんねん、名刑事？」

顔は笑っているが目は笑っていない。しかし、俺の説を一蹴する合理性は有している。詳しい調査は必要だが、宇野の身なりからしてその片鱗は見せているし、凡と宇野がいがみ合っている現場をこの目で見たわけでもない。

「なっ、証拠なんてあれへんやろ？俺のこと疑つても時間の無駄やで、もつと効率的に動かなあかん」

黙って俯いている俺の横腹を、はっはっ、と笑いながらを2、3度叩く。たえ宇野が犯人だとしても、ここから攻めるのは現状無理だ。「そうだな」と言い残し、その場を離れた。

腕組みしながら歩いていると、芝井もソファに座りながら同じポーズをとっていた。捜査が終わったのかな。

「もう終わったのか？そろそろ意見交換といくか」

そう言つと芝井も黙って、コクン、と頷いた。

ハウダニットからの捜査

芝井は、新田が歩き出した後姿を確認すると「さて」と独りごち、遺体のそばへ座った。凡のそばには破片が散らばっている、カップは運よく割れてなく転がっているの、受け皿が割れたのだろう。

さっき新田と話した通り毒物による中毒死の可能性が極めて高い。そして、コーヒーを飲んで倒れた。コーヒー或いはカップのどこかに毒物が混入、付着していたと考えるのが妥当だろう。

誰がどのようにすれば犯行が可能なのか？

第一に浮かぶのが岸田。コーヒーを入れた張本人なのだから、毒物を入れるチャンスはいくらでもある。コーヒー粉に粉末を混ぜたのか、お湯を注ぐときに液体を混入させたか。

すり替えも可能だ、自身が飲んでいる毒物入りのコーヒーを凡のコーヒーとすり替えた。しかし、すり替えなら凡に近づいた人すべてに可能性がある。岸田がコーヒーを渡した後、凡に近づいた人物はいただろうか。少なくとも俺は見えていない。

転がっているコーヒーカップを摘みあげた。数回口につけた跡がある以外は、俺が飲んでいたカップと外観的な違いは見出せない。裏を見ると若干陶器が剥離しているのと、汚れが目についた。この違いで毒のついたカップを凡に渡す方法は可能なのか。しかし、この方法を採用したとしても岸田の犯行であることは動かない。コーヒーを配ったのが当人なのだから。

次に大久保について。大久保が凡のいるテラスに向かったとほぼ同時に新田が部屋に入ってきた、新田の奴が気を遣ったのだろう。凡と大久保が二人でテラスにいるときに何らかの細工はできたか？ コーヒーには当然無理だ。とすれば手か、指か、衣服か。

しかし、その部分に毒物を付着させたとしても、凡がそこを口に含む、或いはコーヒーカップに触れた上でその部分に口をつけなければいけない。非常に運任せのトリックだし、成就する可能性も極

めて低い。しかも後の捜査でその部分に毒物が付着していることがわかれば即座に看破されてしまう。トリックを使用する、ということとは見破られないように、自分に疑いがかからないようにすることが大前提となる。となると、大久保に犯行は無理か。凡に一番頻繁に近づいていたのは大久保だ、コーヒーを渡す以前にトリックを仕掛け終えていたとしたら可能性はあるが、積極的に疑う理由は見当たらない。

次に宇野。一番感情的になっていたのは宇野だが、そのようなことが合理的理由とは到底言えない。犯人が岸田でなければ、何らかのトリックを弄さなければ不可能だ。宇野の場合にはどうすれば可能か。共犯？しかしそれなら誰にでも言える。やはりトリックを解くことが近道か。

三木はどうだった。ずっと座って呑んでいたようだったが。たまにビールを取りにキッチンへ消えていたのがほんの1分弱、何か仕掛けることはできたか。俺が知るところ凡と三木が会話しているところを見ていない、仕掛けることが出来るのはコーヒーカップ、あるいは料理やその周り。

そう考えたあと、ある疑念がよぎった。無差別殺人ってことはないよな？つまり殺せたら誰でも良かった、という可能性はあるのか。ないとは言えないが、限りなく低いだろう。それならコーヒーではなく皆が触るであろう料理や皿、フォークやスプーンに紛れさせた方がよっぽど足が付きにくいし確実だ。やはり凡を狙ったものであると考えた方が妥当だろう。

最後は乾。性格的にトリックなんて使いそうもないが、考察してみよう。俺とも一回会話したな、比較的動いていたから何かしら可能性はあるか。けど乾もキッチンに入ったときの一人の時間が短く、凡と会話した時間も短い。そんな簡単に仕掛けることができるトリックなのか。

誰なら犯行可能か、からのアプローチには難がある。どうすれば可能か、というアプローチにシフトした方が良さそうだ。

再度コップを見た。何回見ても、他のコップと見比べても先程と変化なし、まあ当然だが。料理を取った皿、あるいはフォークやナイフも確認したが同じ結果。凡のところに置く瞬間に目印を拭き取った、剥がした等の細工は可能か。しかし、そうしたとしても一時しのぎにしかならず、詳細を調べれば必ず足がつく。

ああ、そうだ。凡がコーヒーを飲んだ後倒れた、という事実は覆らないわけだから他の場所は付随で調べればいいか。

じゃあ次に調べるところはキッチンだな。クルツと勢いよく反転してキッチンへ向かった。

キッチンには岸田と乾が座っていた。不安げにこちらを見ているが、聴取は新田の役割なので視線を気にせず作業にかかる。

「何してるの？」

座りながらごそごそしていた背後から、岸田が話しかけてくる。

「捜査だよ。犯人はどうやって毒を仕掛けることができたんだろうってね」

振り向かず作業を続けながら会話する。

「その証拠がここにあるの？」

「さあ。あるかもしれないし無いかもしれない」

「新田君とは色々と話したけど」

「そうか」

対応が無愛想だったせいとかその後口を挟むことはなく、傍観者に徹することにしたようだなによりだ。

コーヒー粉の瓶は5分の4ほど残っている。新品を使用したように封を開けたてのコーヒーの香りが残っていた。この瓶の中身を使用したことは間違いないが、仮にこの中に毒物が混入されていたら飲んだ人全員アウトだろうから中身は関係ないだろう。

次は洗い場。三角コーナーには料理後の生ゴミ、流し台には料理時に使用したボウルやフライパン等、流しには飲んだ後のコーヒーカップが1セット置いてある。ゴミを漁ってもコーヒーカップを持ち上げてみても何も発見できない。何か隠すにはもってこいの場所

だと思っただが、空振りだったか。

今度は向かいにある棚を見る。凡の親父のこだわりか、小皿から大皿まで、小さいコップからワイングラスまですべて各々1種類に統一されていた。したがってコーヒーカップにしても、受け皿にしても全て同じ、使用されていないコーヒーカップが出番を待つように整列している。几帳面な性格なのか、持ち手や模様に至り同じ方を向いている。見たところ全て同じ方向に並べられていて、使用するために取ったところを除けば、不自然な点は見当たらない。

キッチンにはトリックには利用されていないのかもしれない。少なくとも容器等を隠した可能性は低い。これだけ整然と並べられていると一つ異様なものが混ざれば浮いた存在となり、返って発見され易くなる。

うーん、と小さく唸り俯きながらキッチンを出る。岸田、乾の視線を感じたが声を掛けられなかった。俺が小難しい顔をしていたせいかもしれないが、良い事だ。

フロアに戻ると本日の定位置に座って腕を組み、頭の回転速度を上げていく。

誰に犯行が可能か、というアプローチを捨てて、どうすれば犯行が可能か、という点に絞って考えてきたが、こちらもあまり芳しい成果は上げられていない。

となると、あと考えられることは新田が調べたことと俺が調べたことを総合的に勘案して答えにたどり着く方法か。

噂をすれば何とやら、ではないが新田も聴取が終わったのかこちらへ歩いてくる。腕を組んでいるのが一人前のようで――半人前のくせに――笑えた。

「もう終わったのか？そろそろ意見交換といくか」

新田が話しかけてきたので黙って頷いた。

意見交換

「どうだった、何か掴んだか？」

様子を窺うが、芝井は「あまり成果は得られてないな」と心許ない返事。

「お前から話してくれ、先に色んなことを確認したい」

芝井が低い声で促してくる。その口調や表情からして、よっぽど難航してるみたいだ。それは俺の方も同じことなんだが。

「よし、じゃあ俺から。俺は動機面と事件発生前後の人の動きに関して確認作業を行った。まず、簡単な事件発生前後の動きから」

パラパラと手帳をめくる。

「俺がテラスで凡と離れたのと入れ替わりに大久保が凡と話をしている」

「お前が気を利かせたんだろう？」

「まあな、それに大久保と一緒に聞きたい事も聞けやしないからそう言った途端、芝井がハツと思いついたように話しかけてくる。

「そういえばお前一旦部屋に入っすぐ、またテラスに行ったよな、忘れ物か？」

「いや、クラスメイト同士が結婚するんだ、せめて俺だけでも祝福の言葉を掛けようかな、と思ったんだけど、あいつらコソコソとキスしてやがった。祝福の気持ちが一瞬で萎えてすぐに部屋に戻ってきたというわけさ」

その光景を思い出して顔を歪ませた。

「ははあ、それを妬んで怒っていたんだな」

芝井が面白半分で応じる。

「妬むか、馬鹿。時と場合を考えろってことだ。いつでも出来ることを、まるで他人の神経を逆撫するようなことをするなよ」

「俺に言うなって。まあそういう情事を見せられて、純情な新田刑事はえらくご立腹だったっていうのは判ったよ」

芝井が飛んだ唾をハンカチで拭きながら話す。そんな皮肉を物ともせず続ける。

「え」と、ほら、何処まで話したか判らなくなっちゃったじゃねえか。そして、しばらくして凡と大久保が同時に部屋に入ってきた。二人は同じソファに座ると思いきや、凡だけはソファに近づいただけで料理の方へ歩き出した。そこでしてた内容は判らない――料理に手を付けていないことは確かだ――が、少しして岸田がコーヒーを凡に渡して会話している。岸田が離れてコーヒーを飲んだ直後、凡が苦しみ出して倒れた」

一旦手帳から目を離し、芝井の方を見る。

「うん、そんなところだろうな。次は動機か」

この時点で思うところは無いらしく、先を促されたので再度手帳に目を移す。

「動機か、一人ずついくぞ。真つ先に思い付くのが岸田。凡に振られ、大久保に裏切られたことで凡に殺意を抱くことは十分考えられる。しかも、さっきの事件前後の動きから見ても最有力の存在だ。次に宇野。本人は否定していたけど、凡と反りが合わなかったのは事実のようだ。凡が宇野に対して辟易してたのは俺が確認しているから間違いない。凡と同じような憎しみが宇野の方にあつたとしてら犯行の動機にはなるが、感触としてはイマイチ弱いような気がする。次は三木。凡に50万借金している、というのは本人の弁だから正確な額は調べないと判らない。しかし借りている額がいくらであれ、凡の執拗な取立てに我慢ならずに、という可能性は十分考えられる。返せと煩わしかった、と言っているのは三木自身から聞いているから動機にはなり得る。最後に乾。一番潔白に近いのが彼女だが、考えられるとしたら凡と岸田と大久保の三角関係に介入していた、という点。冗談でも、大久保を殺したい、と言っていたし凡も同罪だと切り捨てた。けど、それが直接の動機となるか、正直こじつけのような気がする。俺の捜査報告は以上だ」

手帳を閉じ、終了を強調して芝井の意見を待つ。

「それで自分の捜査で判ったことは？」

「結論から言うと、岸田が一番怪しい、ということだ。しかし疑問は多数ある。それは、わざわざ特定されるような動きをしている、といった点。計画的な犯行の場合、トリックを弄する際に自身が安全圏に入れるように細工しなければ全く意味を成さない。今回の事件の場合、どのようなトリックを使ったとしても、自分が疑われることについては逃れようも無い。しかも最有力だ。これが岸田の計算だったとしてもかなり危険な橋を渡って、得ることが出来るメリツトも少ない。計画的犯行でそんな策を選ぶだろうか、という疑念は取り除けない。かといって犯人が他にいる、と積極的に疑うことが出来る人物もいない。非常に難解だ、動機面からのみでは解決に辿り着くことは無理なのかもしれない」

ふう、とため息をつき、首を左右に振る。お手上げだ、というふうに。

「なるほど。じゃあ次は俺の番だ」

芝井は少し間を置いて話し始めた。

「まず最初に、毒を何処に仕込んだか、について考えてみよう。凡がコーヒーを飲んだ後倒れたというのは俺たちが確認しているので、コーヒーやコーヒーカップ、或いは凡の体や衣服といったことが考えられる。凡に特定の癖か仕草なんてあったか？例えば爪を噛む、とか」

「俺の知るところでは無いな。凡の事が気になっていたので逐一様子を窺っていたけど、そんな素振りも無かったし」

芝井はそれを聞くと満足したのか、うんうん、と何度も首を縦に振る。

「じゃあ、衣服や体に付着させた、という線は薄いかもしれない。完全に『当たるも八卦』的な犯行になってしまっからな」

「ふうん。そうするとやっぱりコーヒーか」

「と、思う」

「思う、って何だよ。それしか残ってないじゃないか」

齒切れの悪い芝井を咎めるような口調で攻め立てる。

「とりあえず先に進もうか。まず、コーヒー粉に混入させた、という可能性は無い。そんなことをしていれば、俺もお前も今頃あの世行きになっているはずだからな。そして、コーヒーカップという可能性も低い」

「コーヒークップが犯行に使用されていない、という根拠は？」

勢いそのままでまくし立てる。

「凡のコーヒークップを見てみると、数回口を付けている形跡があった。カップの縁に毒が塗られていたのなら一口目でアウトだ」

「一部分に塗られていて、数口目にそこに当たったっていう可能性が残されるんじゃないか？」

「いや、可能性は低い。それじゃ凡がそこに口を付けるのは運任せになってしまふ。仮に犯人がその『くじ引き』作戦が当たったとして。それなら犯人は岸田以外に考えられない。コーヒーを任意に配れるのもその後凡に近づいたのも岸田のみ、身辺を探って毒を持ち込んだ容器が発見されてあっけなく事件解決、なんて思うか？」

「思わない。わざわざ毒物を持ち込んでこの舞台を選んでの犯行、偶然性を狙った杜撰極まりない計画を立てるわけがない。犯人は確実に凡を殺せる方法を選んでいるはずだ。」

「いや、俺もお前と同じ意見だ。犯人は間違いなく凡だけを狙って、確実に殺しにかかって、成就させたと考えている」

「だろ？そして最後は、コーヒーの液体そのものに毒を混入させた可能性しか残されていない。しかし、これでも犯行は岸田しか不可能、根拠は先程と同じ」

動機、発生前後の動き、トリック。どれを投げてでも岸田に当たる。無理だ、他の人間に凡を殺すことは出来ない。

「俺の報告は以上だ。つまり、お前の捜査でも俺の捜査でも総合的に考えても犯人を炙り出すことは出来ない、八方塞がりでお先真っ暗だ」

不吉な事を言う奴だ。が、事実そうなのだから打つ手無しだ。

「これからどうする？」

再捜査するか、身辺を調査するか、とにかく新しい情報を得ないと答えに辿り着けない、と思ったのだが芝井の考えは違った。

「どうするって、もう一回考えるんだよ」

「考える？もう一度考え直したら違う答えが湧き水みたいに出てくるのか？」

こちらも頭が混乱してきて、自然と語気も強くなる。

「じゃあ逆に聞くけど、もう一度調べ直したら、皆の身辺調査をしたら、何か決定的な証拠が出てくると思ってるのか？」

時間の無駄かもしれない、とは思う。しかし、今のままではどうすることも出来ない。

「俺は、情報の手駒は揃っている、と考えているんだ」

「それなら何故答えに辿り着けない？」

「俺らが犯人より馬鹿だから駒を正確に並べきれないだけだと思う。だから、考え直す。そして今度は犯人の思考を追い越さなければならぬ」

現時点で犯人に出し抜かれていることが相当悔しいのか、何時に無く険しい表情の芝井を見て、こちらも気合を入れ直す。今度こそ雲のように変幻自在に姿を眩ませる犯人の正体を暴いてみせる。凡よ、見ててくれ。芝井と俺が、必ずお前の無念を晴らしてやるからな。

再考

「どこが間違っているんだろう？」

腕組みしながら、芝井に投げかける。

「さあ。一部分かもしれないし全部かもしれないし」

芝井も腕組みして考え込んでいる。誰がどう見ても、捜査が行き詰っていることが丸判りの状態だ。

「お前、以前にもここに来たことがあるんだろ？違っているところとか変わった事とか無かったか？」

本当に一から考え直すつもりなんだな、と思いながらも視線を上に向けて今日の出来事を思い浮かべようとした。

「来た瞬間に違和感を覚えたのは、家具のレイアウト。学生時代のときと若干変わっていた」

「どう変わっていたんだ？」

「細かいところまでは覚えていないが、ソファと机の位置が変わっているし、ソファの数も増えている。それだから、以前より狭く感じた」

芝井は髪の毛を指で弄びながら——考える時の癖だ——耳を傾けている様子。

「他には？」

「他に、皆と旧交を温めようと話して回ったときに女子達からかわれて変な飴を食べさせられて笑い者にされたな」

「変な飴？」

「そう。外見は普通の飴なんだが、中に唐辛子が入った激辛飴。大久保が作ったものらしくて、皆も食わされたから今度は俺がターゲットになったってことだろう。あんなもの、一回舐めりゃ二度と手出ししないだろうから一人につき一回きりの遊びだし、生来のイタズラ心に火が点いたってとこじゃないか」

あの辛さを思い出したかのように舌を出して顔を歪めた。

「ふうん」

芝井はそんな浮ついた遊びには興味が無いようだ、顔色一つ変えず相槌を打っていた。

「後は、凡の様子ぐらいだな。お前も言っていたように学生時代とは雰囲気違って、何か近づき難いような。結婚するって聞いただろ？その時も少しも嬉しそうな表情じゃなかった。照れくさいとも違う硬く難しい顔をしていた。凡に直接聞いても話してくれなかったし、会社も下火だが行き詰っているわけでもない。あつ、そうだ。凡に奇妙な問題を出されたな」

「問題？」

「うん。なぞなぞと言ってもいいかもしれない」

これには芝井も興味を持ったらしく、上体を気持ち前のめりにした。

「どういう話の流れでそうなったんだ？」

「三角関係について凡はどういう風に考えていたのか、という質問の後だったかな。凡は聞かれるのをものすごく嫌がっているようだったが、何か吐き出すことで凡の気持ちに楽になればいい、と思って踏み込んだんだが返ってきたのはなぞなぞだった」

「その内容は？」

そうだ。芝井にも同じ質問をして、どう反応するか試してみよう。「えー、ある人が二枚の色紙を差し出してきて『どちらか選べ』と言ってきた。一つは青色でもう一つは緑色。けれどお前は赤色が好きなんだ。お前ならどちらを選ぶ？』というような内容だ。お前ならどうする？」

「どちらもない
即答だった。」

「ああ、そうだ。今思い出した。どちらもいない、という解は無しっていう前提だった」

「先に言えよ。じゃあ緑だ」

「どうして緑を選んだんだ？」

「俺は赤が好きだ、という前提ならば青を選ぼうが緑を選ぼうが大した差は無い。悩むだけ無駄だろ」

芝井のクールな解答を聞いた途端、脳の中に電撃が走った。そうか、そういうことだったのか。

「判った！芝井、判ったよ」

興奮した俺の姿に呆然としている芝井の返事を聞かずに話し続ける。

「凡は三角関係の状況を色紙に例えたんだ。つまり、青が大久保、緑が岸田。凡は赤が好き、ということはどちらも愛してはなかった。しかし、何故かどちらかを選ばなければいけない状況になっていた。凡は長いこと悩んだが、その間にもいがみ合いは度を増していき収拾がつかなくなって、大久保の勝利により付き合うことになってしまった、ということ。これなら凡が『実力で手にした物なんて一つもない』と嘆いていた気持ちにも合致する。凡は感じていたんだ、岸田にしても大久保にしても、自分の付加価値にしか興味を示していない、と。『どっちを選んでも結果は同じ』、これが凡の出した答えだ」

怒涛のように言葉を並べたると、またしても俺の唾をモ口に受け止めていた芝井は、俺を睨みつけるような表情でハンカチを取り出した。

「非常に興味深い話だ。しかし、そのなぞなぞが解けたとしても事件が解決するわけでもない」

そうだな。あまりの嬉しさに我を忘れてしまったが、解いたからといってこの後の展開が激変するわけでもない。

「とりあえず気付いたところはこんなもんだぞ。何か判ったか？」

「判らん」

目を合わせた後、ふう、と二重奏。

「毒の混入経路はコーヒーでいいんだろうか？」

俺の捜査範囲で判らなければ、矛先を変えるしかない。

芝井も歯切れが悪い。

「どのように混入させることが出来たのか、というところが問題か
」

けどそれは先程検証した。コーヒーの粉、液体、カップ。さらに
凡はブラックで飲んでいるので砂糖やミルクを入れた形跡も無けれ
ば、スプーンを使用した跡も無し。選択肢も限られた中でどうすれ
ば。

「無理だ」

「えっ」

ずっと考え込んでいた芝井が聞き返してくる。

「コーヒーに毒を入れるのは不可能だって言ってるんだよ」

「不可能、か」

再び俯いて目を閉じた。しばらくの間沈黙が続いた、と思った
が、芝井の口元が微かに動いているのが確認できた。ブツブツと呟
いているような唇の動きをじっくり観察してみると、「不可能、
不可能」と消え入りそうな声で言っていた。

そのまま寝てしまうんじゃないだろうな、と心配して顔を近づけ
ると、急にパツと目を開けたのでビックリしてしまう。

「何か」

話し始めた俺を手で制した。しばらく鋭い目つきで顎に指を当て
て考えた後、ホツとしたように一息ついた。

「お前が動かなくなったから、寝てしまったんじゃないかと思った
よ」

「こんな時に寝るかよ、お前じゃねえんだから」

冗談で返す芝井の表情は、さっきとうって変わって明るくなって
いた。もしかして。

「何か」

また手で制された。芝井はスツと立ち上がると、凡の周辺を床に
顔が擦れるんじゃないかというほど近づけて何か探したあと、凡の
口元と口の中を入念に調べた後ソファに戻りドサツと座る。再び俯

いて考え込んでから、うんうん、と何度も頷いた。

「何か判ったのか？」

首を長くして試験結果を待っている受験生のようにドキドキしながら、芝井の口が動くのを待つ。

「トリックが解けたかもしれない」

不敵な笑みと共に俺の顔を見た芝井の表情は、いつも事件が解決したときに見せるそれだった。

謎解き

「どうやってコーヒーに毒を入れたんだ？」

鉄壁の牙城を崩した内容を早く聞きたい、身を乗り出して集中する。

「答えは既にお前が出している」

出たよ、芝井が最も楽しみにしている焦らし戦法が。あのドヤ顔、何回見ても憎たらしいな。

「答えて、判らねえよ」

芝井は俺の困った表情に満足したようだ。ゆっくりと口を開く。

「不可能なんだ」

「はあ？」

「俺たちの検証は的を得ていた。つまり、『コーヒーに毒を混入させることは不可能』なんだ」

「じゃあ、どうやって凡を殺すことが出来たんだ？」

「俺たちは凡が倒れる前後の状況にこだわりすぎた。毒は凡がコーヒーを飲む前、もっと言うところ料理が並べてある机に立つ前に仕込まれていたとしか考えられない」

何を言い出すんだ、こいつは。そんな遠隔操作の爆弾をどうやってセットすることが出来るんだ？

「俺たちは先入観を取り除かなければいけない。最初はコーヒー。さつきも言った通り、これに固執し過ぎたせいで捜査は行き詰ってしまった。次に結婚話。話が事実かどうかは置いておいて、少なくとも婿の方は全く気乗りしていないことはお前が解いたなぞなぞが暗示している通りだ。最後に全ての検証結果が岸田を指していたこと。これら何重にも重ねられたフィルターは全て心理的、物理的盲点を衝いた犯人の罠だ」

「つまり、コーヒーに毒物を混入させたと思わせて、岸田を犯人に仕立て上げたかった、と？」

手帳に速記しながら返答する。

「そう考えると犯人Xが誰か容易に想像できるだろ？次にこの犯人が、どうすれば凡を殺害できるのか、を考えた。そうしたら俺の頭に一つの仮説が浮かんだ。というか、この方法でしか説明できないという結論に至った」

「その方法とは？」

息を飲んで次の言葉を待つ。

「その前に確認したいんだが、凡はお前が舐めた飴、つまり大久保が作った飴がどういう物なのか知らなかったんじゃないか？」

「ああ。それは直接凡から聞いた。作つてるときは外にいたつて言っていた。そして実物も見ただこと無い、と」

芝井は、当然そうだろう、というふうに頷いた。ということとは。

「もうお前にも想像ついただろ。毒物は飴の中に混入されていたんだ。これなら飴の外側が溶けるまで毒が体内に流れ込むことはなく、その間にアリバイ作りをすることができる」

「どうやって確実に飴を舐めさせることが出来たんだ？俺がテラスで話したときには飴なんか舐めていなかったし、凡の持ち物を検査しても飴の外装フィルムも出てこなかった。誰かが渡したっていう可能性も低いんじゃないか？」

そう言つと芝井は微笑みながら首を左右に振る。

「いや、俺が考えている方法を使えば確実にその場で凡に飴を舐めさせることが出来る」

「どんな方法？」

芝井は一呼吸おいて、息と言葉を同時に吐き出した。

「キス、だよ」

「キス？」

「そう。自分で舐めていた飴を口移しすれば、確実に相手に舐めさせることができ、外装フィルムも相手に渡さないで済む。舐めてすぐキスして移せば、毒物が染み出てくる危険性はほぼゼロだ。後は離れてアリバイ作りに専念すれば、容疑者から外れることが出来る

ってわけさ」

うつん。こんなことが行われていたとはにはわかには信じがたいが、合理性を有していることは否定できない。しかし疑問点もある。

「それで飴を舐めさせ、殺害することができたでしょう。その後は？ 飴を全部舐めきる前に毒物が流れ出していることは間違いないから、その残骸が見つからないと証明できない」

これは芝井にとっては手痛い質問だろうと思っていたが、芝井はそれも見越していたようで穏やかな表情をしている。

「だから真っ先に近づく必要があったのさ、心配する振りをして。犯人は毒物を吐き出さそうと懸命な振りをして、その実飴の回収に懸命だったってわけ。さっき俺が調べたら飴の残骸は見られなかった。犯人が回収後まだ持っているか、凡の胃の中にあるかのどちらかだが、おそらく後者だ。小さい欠片まで回収できるとは考えにくいから凡が飴自体を飲み込んでしまったんだろう」

後者なら物証が手元に残っていることになるので勝機ありだ。逆に、犯人が持っているなら、トイレのついでに流されたりしていれば捜査は難航してしまう。こちら辺は相手心理を揺さぶればどうにかなるか。

「つまり犯人は大久保だ、と言いたいんだな？」

「これでしか合理性、整合性のある答えを見出すことが出来ない」

芝井の話を聞けば聞くほど、これしかない、と思う。と同時にこみ上げてくる感情、クラスメイトを逮捕しなければいけないという事実。

「どうする？」

「どうするって？」

芝井の言っている意味が判らなくて問い返す。

「お前にクラスメイトを断罪することが出来るのかって聞いているんだ。お前に少しでも迷いがあるのなら、その役は俺が引き受けてもいい」

俺の心情を察して言うてくれたんだろう。芝井は決して話し好き

でもなければ、トリックの種明かしをこれみよがしに披露して悦に入る、というタイプでも無い。心の底から心配してくれているのだ、しれっとした言い草で俺に気を遣わせないようにして。こういう友人の心遣いにどれだけ救われただろう、涙が出そうになるがグツとこらえた。

「馬鹿言え。俺は刑事だ、相手が誰であれ私情を差し挟むことは許されない。それに凡と約束したんだ、俺の手で犯人を捕まえると」
「そうか。じゃあ後は任せた。きっちり仕事してこい」

芝井はそう言っただけ俺の背中をポンと叩くと、背もたれに身を委ねて目を瞑った。それを見届けるとスツと立ち上がり、確かな足取りで皆がいる方へと歩き出した。

エピソード

しばらくして目を開けた芝井は新田が話している様子を見た。

皆が円陣のように新田を囲み、話している内容を逐一確認しているようだ。窓の外を見ると、雨はやんで鉛色の空の雲間から光が差し込んでいる、ギリギリ間に合ったようだな。

皆が驚いた顔で一斉に俯いている大久保に注目した。大久保自身も驚いた顔をした後で、新田を睨みつけるような表情で反論している。どうやら犯人の特定をしたところらしい。新田の表情を確認した、鋭い目つきで勢い良く唾を飛ばしている。サポートする必要はなさそうだ。全く世話を焼かせるよ、まあ優しいのはあいつの長所でもあるんだがな。

などと考えている内に双方がヒートアップしてきて、こちらにも声が聞き取れるくらい大きくなっていった。

「私がやったっていう証拠はあるの？」

大久保が不敵な笑みを浮かべて新田を睨む。どうやら自分が細工したトリックに絶対の自信を持っているようだ。

「このトリックの最大の難点は、殺害後どのように飴の欠片を回収するかにある。だから凡が苦しみ出したら、真っ先に駆けつけなければいけなかったし、事実お前は一番早く凡の傍に行ったよな」

「だから？そりゃ恋人の様子がおかしけりゃ駆けつけるでしょ。それに私、そんな飴なんて持ってないよ。どこでも調べたらいいよ」

両手を広げて潔白をアピールしている。が、この切り替えしも新田は織り込み済みのはずだ。

「可能性として二つ考えることが出来る。一つは大久保が回収した後どこかに隠した、或いはトイレや流し台で流して隠蔽した。もう一つは凡が飴自体を飲み込んでしまって、結果的に証拠を隠してしまった可能性。おそらく後者だろうと思うが、どちらにしても凡の口内に飴の痕跡を残しているし、それが可能なのは大久保しかないな

い」

少し間が空いて大久保ががつくりとうな垂れた。犯行を認めた瞬間だ。

「ねえ、お願いが」

大久保が話し始めたのを、新田がそれを上回る声量で制する。

「自首は認めない。言うチャンスなんていくらでもあったにもかかわらず岸田に罪をなすりつけようとしたり、旗色が悪くなつた途端に許しを請う態度は見苦しいにも程がある。たとえ俺が許したとしても、凡が許してくれると思っっているのか？」

パクパクと口を動かそうとしていた大久保は再び首を垂れた。長い静寂の後、全ての終わりを告げる玄関のベル——警察が到着したのだ——が鳴った。

大久保がパトカーに乗せられて行く姿を、芝井と共にテラスから眺めていた。

「お疲れ様、お前にしちゃ上出来じゃねえか」

芝井が穏やかな笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「そうか？でも今回は凡の為に、っていう気持ちが強かったからな。真価が問われるのは次回以降だ」

風でなびく髪をかき上げながら答える。しばらく無言で遠くを眺めていたが、

「最後のキスは、甘い衣に包まれた危険な味、か」
芝井がぼそりと呟いた。

顔を上げ周りを見る。そこには学生時代のままの、そしてこれからも変わらないであろう風景が、俺の心を突き刺すような冷淡な表情で佇んでいるように見えた。

<
J
>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7459q/>

ラスト・キス

2011年3月6日12時25分発行